立山町文化財調査報告書第２冊

立山町埋蔵文化財分布調査報告II

１９８６年度

立 山 町 教 育 委 員 会
富山大学人文学部考古学研究室

１９８７年３月

立山町文化財調査報告書第２冊

立山町埋蔵文化財分布調査報告 II

1986年度

立 山 町 教 育 委 員 会
富山大学人文学部考古学研究室

1987年3月

序

霊峰立山の山麓に広がる立山町は、古くより人々の生活の場として、また立山禅定に代表される信仰の場として、数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中で、これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していこうとしています。

町ではこの事態を重視し、かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが、真の地域社会の発展へとつながるものであるとする観点から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され、文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施及び報告書作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

昭和62年３月

立山町教育委員会

教育長　坂　井　市　郎

例　　言

1　本書は、立山町（たてやまちょう）教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第２年度（1986年度）の報告書である。

2　調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成しこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は、立山町教育委員会社会教育課森秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力して行なった。

4　本文は宇野隆夫（富山大学人文学部助教授）、森秀典、大場裕之・酒井聖子・沢辺利明（富山大学人文学部考古学専攻学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括し、通し番号を付して示した。本文のルビ数字はこの参考文献番号である。

6　遺物番号は図版ごとに通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し、実測図と写真の番号を統一している。

7　本書には、分布調査以前に採集・発掘された未報告の資料を出来る限り収録した。その区別は本文中に示し、遺物の散布状態として示す数値からは除いている。

8　編集は秋山進午、宇野隆夫と森秀典が協力して行なった。

9　本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財センター山本正敏氏、富山県教育委員会松島吉信氏、魚津市教育委員会麻柄一志氏、調査団顧問の岡崎卯一氏、同安田良栄氏をはじめとする方々から多くの貴重な御教示をうけた。また石器の石材は富山大学教養部教授藤井昭二氏に鑑定していただいた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

目　　次

第１章　はじめに……1

1　調査の目的……1
2　調査の経過……1
3　立山町の地勢と自然環境……2
4　1986年度調査地区の地勢と地区割……7

第２章　分布調査の成果……8

1　遺跡と採集遺物……8

(1)　六郎谷遺跡……8
(2)　末谷口遺跡……8
(3)　青峰遺跡……9
(4)　吉峰祭祀遺跡……9
(5)　天林北遺跡……10
(6)　天林南遺跡……12
(7)　千垣奥葉遺跡……15
(8)　門の本割遺跡……16
(9)　野口遺跡……16
(10)　不動平遺跡……16
(11)　仲宮寺遺跡……17
(12)　古屋敷Ⅲ遺跡……18
(13)　古屋敷Ⅱ遺跡……18
(14)　古屋敷Ⅰ遺跡……18
(15)　芦峅寺城址……20
(16)　雄山神社中宮……21
(17)　善道坊……22
(18)　その他……22

2　遺物の散布状態……23

(1)　Ⅱ１地区の散布状態……23
(2)　Ⅱ２地区の散布状態……30
(3)　Ⅱ３地区の散布状態……30
(4)　遺物の散布について……31

第３章　おわりに……32

参考文献……34

図版目次

関連頁

図版1　II 1 地区航空写真……立山町教育委員会提供……2～7

図版2　II 2 地区航空写真……立山町教育委員会提供……2～7

図版3　II 3 地区航空写真……立山町教育委員会提供……2～7

図版4　遺物実測図(1)……大場製図……9

図版5　遺物実測図(2)……田島・酒井製図……8～12

図版6　遺物実測図(3)……酒井製図……10～12

図版7　遺物実測図(4)……岩瀬・酒井製図……12～15

図版8　遺物実測図(5)……酒井製図……12～15

図版9　遺物実測図(6)……酒井製図……12～15

図版10　遺物実測図(7)……沢辺・酒井製図……16～20

図版11　遺物実測図(8)……大竹・酒井製図……17～22

図版12　遺物写真(1)……宇野・森・大場・沢辺撮影……9

図版13　遺物写真(2)……宇野・森・大場・沢辺撮影……8～12

図版14　遺物写真(3)……宇野・森・大場・沢辺撮影……10～12

図版15　遺物写真(4)……宇野・森・大場・沢辺撮影……12～15

図版16　遺物写真(5)……宇野・森・大場・沢辺撮影……12～15

図版17　遺物写真(6)……宇野・森・大場・沢辺撮影……12～15

図版18　遺物写真(7)……宇野・森・大場・沢辺撮影……16～20

図版19　遺物写真(8)……宇野・森・大場・沢辺撮影……17～22

図版20　II 1 地区の遺跡と遺物採集地点……宇野・森作成……23～30

図版21　II 2 地区の遺跡と遺物採集地点……宇野・森作成……30

図版22　II 3 地区の遺跡と遺物採集地点……宇野・森作成……30・31

插図目次

第１図　立山町の気候・植物帯の垂直変化……『立山町史』から……２
第２図　立山町西部の地勢……宇野・森作成……３
第３図　Ⅱ１地区図……宇野作成……４
第４図　Ⅱ１地区の地区割……宇野作成……４
第５図　Ⅱ２地区図……宇野作成……５
第６図　Ⅱ２地区の地区割……宇野作成……５
第７図　Ⅱ３地区図……宇野作成……６
第８図　Ⅱ３地区の地区割……宇野作成……６
第９図　Ⅱ１地区縄文時代遺物の散布状態……宇野作成……24
第10図　Ⅱ１地区古代遺物の散布状態……宇野作成……24
第11図　Ⅱ１地区中世遺物の散布状態……宇野作成……25
第12図　Ⅱ１地区近世遺物の散布状態……宇野作成……25
第13図　Ⅱ２地区縄文時代遺物の散布状態……宇野作成……26
第14図　Ⅱ２地区古代遺物の散布状態……宇野作成……26
第15図　Ⅱ２地区中世遺物の散布状態……宇野作成……27
第16図　Ⅱ２地区近世遺物の散布状態……宇野作成……27
第17図　Ⅱ３地区縄文時代遺物の散布状態……宇野作成……28
第18図　Ⅱ３地区古代遺物の散布状態……宇野作成……28
第19図　Ⅱ３地区中世遺物の散布状態……宇野作成……29
第20図　Ⅱ３地区近世遺物の散布状態……宇野作成……29

第1章　はじめに

1　調査の目的

立山町が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、吉峰台地においてである。以後、旧石器(先土器)・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上、弥生時代は町北部のデルタ地帯、古墳時代以降は町中央部の扇状地というように、その生活の場は時代により変化してきているが、現在に至るまで連綿と人々の営みが続いている。

従って遺跡も多数存在しており、1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』[25]においては63箇所の遺跡が登録されている。そしてなお、その後発見された遺跡も多く、未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い、遺跡の保護と開発との調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2　調査の経過

以上の理由により、立山町教育委員会では、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査を行なうことに決定した。

1985年(昭和60年)3月27日に、町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果、町教育委員会を中心とした調査団を編成し、元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することとなった。

調査の方針としては、町域の中でも遺跡分布密度の濃い、町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし、五箇年計画とすること、年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表及び主要遺跡解説等を含む報告書を刊行することが決定された。

また調査の実施にあたっては、町域を8地区に区分し、Ⅰ～Ⅴ地区を当面の対象地域として初年度は第Ⅰ地区、第2年度の本年は第Ⅱ地区について調査を行なった（第2図）。

現地調査は、4月29日～5月5日までと10月6日～10月11日の間、主として土・日・祝祭日に、3回に分けて計9日間、延120人余の参加を得て実施した。

調査団の構成は以下のとおりである。

立山町埋蔵文化財分布調査団

団　　長　坂井　市郎　立山町教育委員会教育長

顧　　問　岡崎　卯一　元立山町史編纂主任

　　安田　良栄　立山町文化財保護審議委員

調 査 員　秋山　進午　富山大学人文学部教授（調査主任）

　　宇野　隆夫　富山大学人文学部助教授（調査副主任）

　　森　　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事

調査補助員　岩瀬　彰利、大竹　　豊、吉田　正人、坂井須美子、西川公三子、林　　文子、

　　大場　裕之、鍛治　常昌、沢辺　利明、酒井　聖子、田島富慈美、辻　　礼子、

　　針木　憲子、松本　典子、押川　恵子、春日　真実、境　　洋子、品川　水美、

　　高村　幸江、田中　道子、安　　英樹、小田木治太郎

　　（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

事 務 局　松井　哲男　立山町教育委員会社会教育課長

　　開上　　寛　立山町教育委員会社会教育課長代理

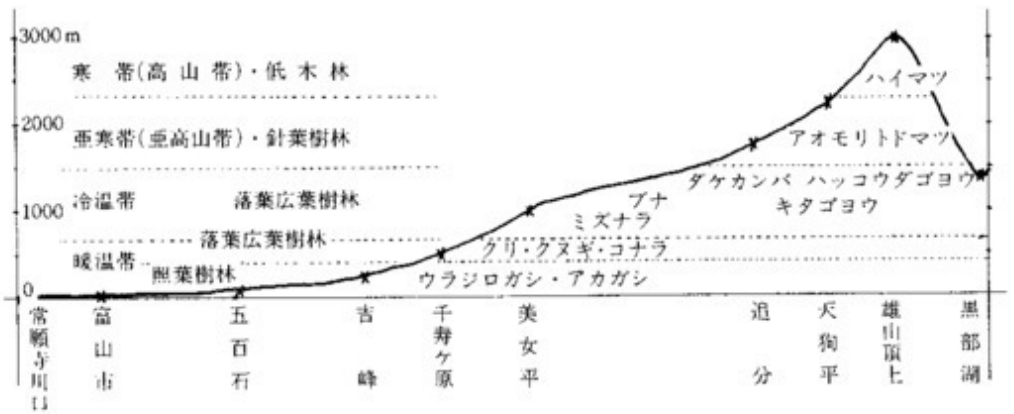
　　跡治　令子　立山町教育委員会社会教育課主任

　　森　　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事

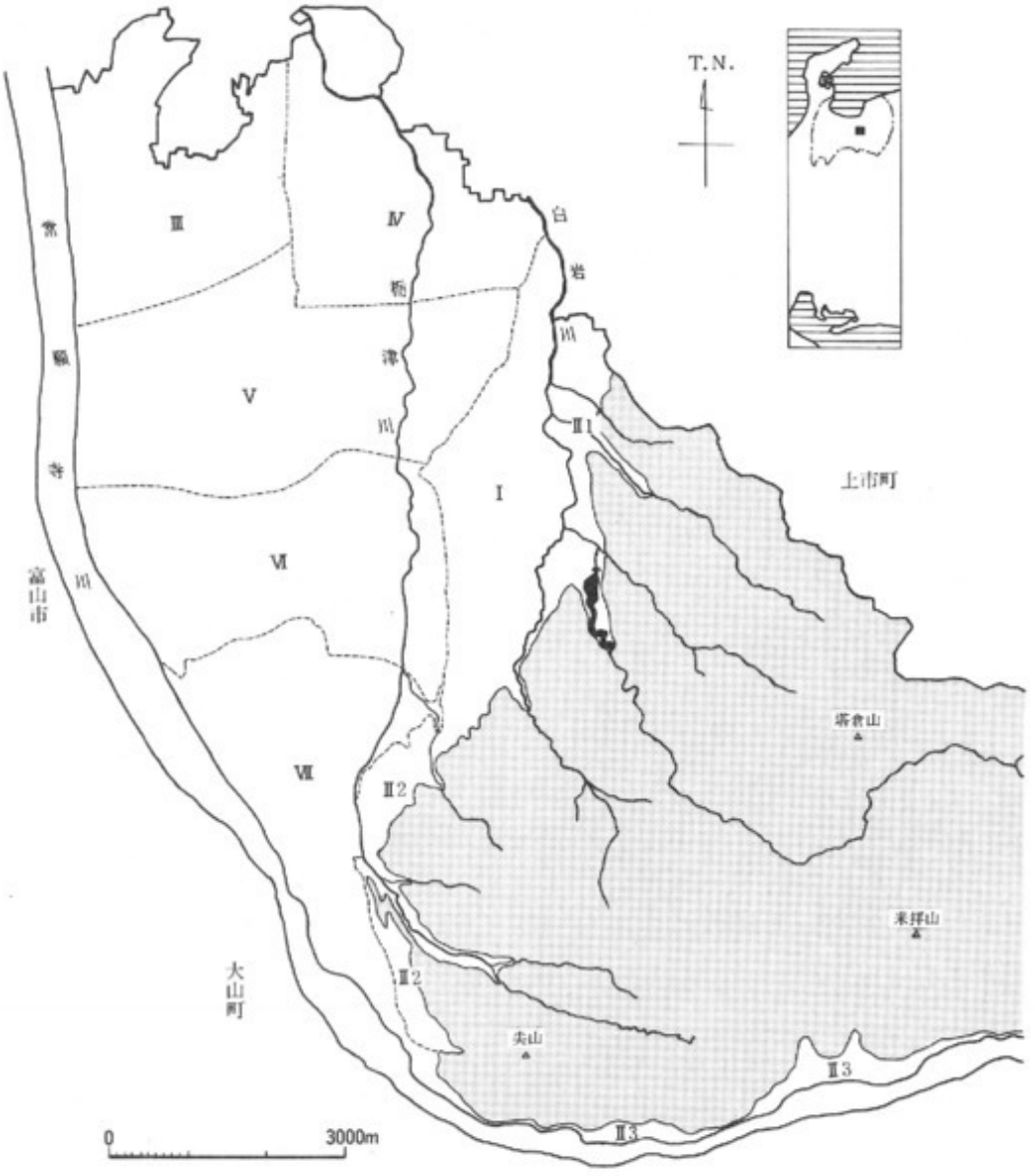
3　立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川に沿って、細長く延びた町である。西は県の中心である富山市に、東は後立山連峰で長野県と接し、東西約43km、南北約21km、面積308㎢を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川とによって形成された三角洲（デルタ）地帯があり、その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの



第1図　立山町の気候・植物帯の垂直変化（『立山町史』から）

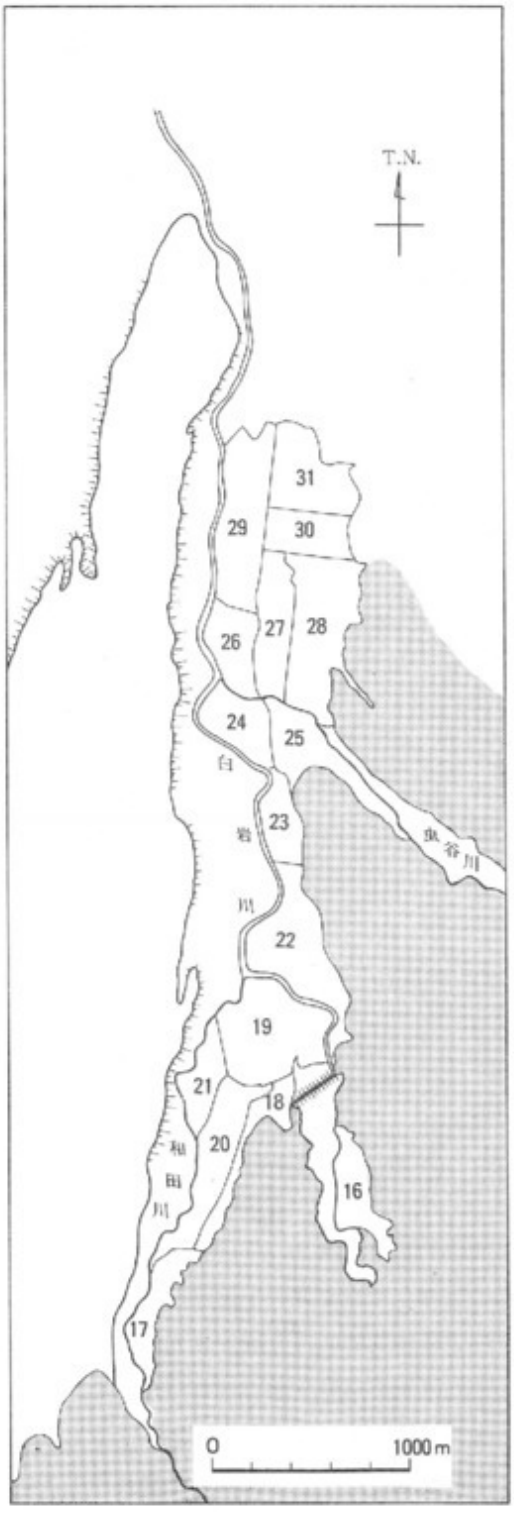


第2図　立山町西部の地勢（Ⅱ1～Ⅱ3地区が1986年度調査区，縮尺1/100,000）

距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に延び、扇頂部の岩峅寺から上流の千寿ヶ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる（第2図）。この河岸段丘の後背地には丘陵があり、さらに標高3000mの山脈へと続く。これが立山連峰であり、ここには氷河地形の圏谷（カール）や、火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ、後立山連峰によって長野県に接する。

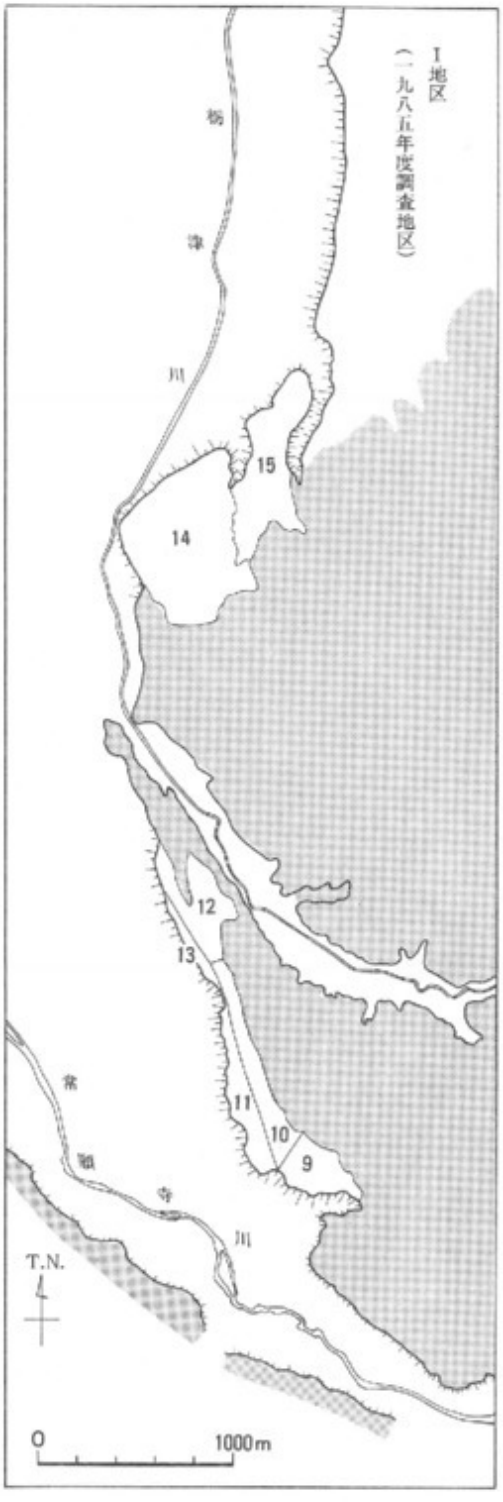
このように立山町は東西の比高差が大きいため、町域には照葉樹林帯、落葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯という多様な植物帯が成育し、それに伴う複雑な動物相も存在する（第1図）。

第3図　II 1 地区図　(縮尺1/40,000)



第4図　II 1 地区の地区割　(縮尺1/40,000)

第5図　II 2 地区図（縮尺1/40,000）



第6図　II 2 地区の地区割（縮尺1/40,000）

第7図 II 3 地区図 (縮尺1/40,000)

第8図 II 3 地区の地区割 (縮尺1/40,000)

4 調査地区の地勢と地区割（第３～８図）

今回の調査地区は、町南部の常願寺川によって形成された河岸段丘上と、町東部の白岩川により形成された河岸段丘上・氾濫原である。以上はきわめて広範囲にわたっているため３地区に分けて調査を実施した（第３～８図のⅡ１～Ⅱ３地区）。

Ⅱ１地区は昨年度の調査地区“上段（うわだん）段丘”の東側に位置し、白岩川と支流の虫谷川・和田川によって形成された河岸段丘と氾濫原である。

Ⅱ２地区は末谷口集落の南方から吉峰をへて天林に至る丘陵上であり、常願寺川によって形成された高位河岸段丘である。

Ⅱ３地区は千垣奥薬遺跡から芦峅寺集落にかけての地域であり、常願寺川によって形成された中・高位河岸段丘である。

これらの地区のうち河岸段丘は、古くより人々の居住に適していたらしく、旧石器時代では吉峰遺跡、縄文時代では天林遺跡や古屋敷遺跡といった、著名な遺跡が存在する。また遺跡の密度も高い。

現在は地区のほとんどが水田等の耕作地、又は集落となっている。また一部の地域では土取り等の開発行為によって遺跡が消滅している。

調査は以上の３地区をさらに、地形の段差・水路・道路等によって31区に地区割し、さらに小地区に細別して実施した。（森秀典）

第２章　分布調査の成果

1986年度の調査によって整理箱４箱分の資料を採集した。これらは2048片、42.1個体分の土器・石器であり、まず遺跡毎に説明して後に、各地区での時期別の散布状態を示すことにする。

１　遺跡と採集遺物（図版４～22）

(1) **六郎谷遺跡**（図版20の31、文献13）立山町六郎谷

遺跡は六郎谷集落の南方約400ｍ、基盤に安山岩が進入して高燥な地となる道路東側の高台に位置する。標高は約170ｍを測る。

過去に、胎土に繊維を含んだ縄文や無文の土器片、石器では小型磨製石斧や砥石類、滑石製玉片、剥片類等が採集されている。また小型の深鉢が、小型打製石斧と共に出土している。遺跡は前期前葉が主体のようであるが、古式土師器片も採集されており、詳細は明らかになっていない。

今回の調査では、越中瀬戸４片を採集したのみであり、そのうち１片を図示した（図版11の25）。茶色に発色する鉄釉をかける越中瀬戸の壺である。

(2) **末谷口遺跡**（図版21の32、文献13）立山町末谷口字開

遺跡は末谷口集落の南方約300ｍ、黒谷川と吉峰開析谷によって開析された舌状台地上に位置する。この台地は吉峰段丘や上段段丘に連なる高位段丘面であり、標高は約200ｍを測る。

過去に半截竹管と楕状具による擬縄文や、刻目文を施した隆帯を組み合わせた文様を持つ土器片が採集されている。石器では、石錘、石鏃、剥片類が採集された。年代は縄文中期のものであると考えられる。

今回の調査では、縄文土器12片、須恵器１片、石器１点を採集し、そのうち石鏃１点を図示した（図版５の５）。なお図版５の１～４は分布調査以前の採集品である。

１は深鉢の口縁部破片であり、胴上半部で外反し口縁部が直立する。半隆起線と隆帯による文様を施し、隆帯上には篦状工具により連続した刻みを施す。縄文時代中期中葉の天神山式[4-33]であろう。

２は波状口縁深鉢の口縁部破片であり、口縁部に隆帯による区画を作り、隆帯上には篦状工具による刻みをもち、区画内は連続刺突を施している。中期後葉の串田新式[4-41]であろう。

３は口縁部破片であり、口唇直下に１条の沈線を表わし、その下に貝殻腹縁文を横方向に連続して施している。その下に横方向に１条の沈線文をひき、頸部には縦方向に沈線文を施しており、工字文の一部と推測できる。中期後葉の串田新式であろう。

４は有孔鍔付土器であり、胴部には縦方向に回転させたＬＲの縄文を施している。

5は凹基無茎石鏃であり、片側基縁を一部欠損する。長さ2.1cm、幅1.4cm、重さは0.8g、石材は玉髄である。

(3) 吉峰遺跡（図版21の33、文献13・15・22・23・24）立山町吉峰字上吉峰

遺跡は吉峰集落の西側に隣接して位置し、一帯は、その西側を北流する常願寺川によって形成された河岸段丘（高位段丘）である。標高は約230mを測る。

1969年から1974年にかけて、4次にわたり発掘調査が行なわれた。第1・2次の発掘調査では層序の概要が確認され、縄文早期の炉跡および縄文前期の住居跡4棟が検出された。第3・4次の発掘調査では縄文前期中葉から中期前葉にかけての住居跡16棟が検出されている。当遺跡での住居跡の発見は合計20棟あまりにおよび、他に埋葬坑らしいものや各種の土坑が多く確認された。1980年の第5次発掘調査では縄文時代早期から晩期に至る資料が得られている。

遺物は発掘調査と過去の表面採集により、縄文時代早期から晩期に至る縄文土器片が採集されている。石器では、早期の尖頭器とみられるもののほか、前期の磨石、石皿、凹石、打製石斧、磨製石斧、多数の石鏃や石匙、石錐、そして分銅形・蝶形石器といわれる赤石製の特殊な石器、玦状耳飾や玉類が採集されている。

今回の分布調査では縄文土器11片を採集し、そのうち1片を図示した（図版4の4）。

なお図版4の1～3・8は分布調査以前に採集されて、未報告であった資料である。また図版4の7は中川氏の寄贈によるものである。

1は平縁の深鉢である。口唇部直下の2条の半隆起線を横走させた上に爪形文を施し、その下に半截竹管を用いた格子文と格子目の交点の円形刺突で文様を構成し、頸部には1条の半隆起線を横走させて文様帯を区画する。頸部から下は横方向に回転させたRLの縄文を施す。縄文時代前期末の朝日下層式期から中期前葉の新崎式[4・6・40]期頃のものであろう。

2は口唇部に指先大の刻み目を連続して刻む深鉢であり、地文には横方向に回転させたRLの縄文を施す。器壁は薄く作っている。後期のものであろう。

3は平縁の深鉢であり、口縁部に1箇所穿孔している。地文には縦方向に回転させたLRの縄文を施す。前期のものであろう。

4は山形の回転押型文を施している。早期[2・37・38]のものであろう。

7は両刃の磨製石斧であり、片側刃部は表面がほとんど剥離している。研磨は全面に及ばず両面に自然面を若干残している。長さは15.9cm、幅は6.7cm、重さは464.0g、石材は凝灰岩である。

8は須恵器椀Aであり、底部に回転糸切り痕を残す。轆轤回転方向は左廻りである。10世紀頃のものであろう。

(4) 吉峰祭祀遺跡（図版21の34A・B、文献44）立山町吉峰野開

遺跡は吉峰部落南端の公民館裏手の高台に位置し、標高は約215mを測る。

1963年の試掘調査で、土師器、須恵器、木炭などを埋納したと推測される遺構が発見された。

出土した土器類は10～11世紀のものが多い。今回ここをＡ地点とした(図版21の34Ａ)。またこの地点から北東に約100ｍのＢ地点では(図版21の34Ｂ)、縄文土器24片、土師器15片、須恵器5片、石器1点を採集し、そのうち縄文土器1片、土師器2片、石器1点を図示した（図版4の5・6・9・10)。

5は縄文土器底部破片である。

6は局部磨製石斧であり、刃部をよく磨いて両刃としている。縄文時代前期のものであろう。長さは14.2cm、幅は6.8cm、重さは332.4ｇ、石材は安山岩である。

9は土師器椀Ｂであり、底部は貼り付け高台をもつ。轆轤回転方向は不明である。10世紀頃のものであろう。

10は土師器杯Ａであり、底部に糸切り痕を残す。轆轤回転方向は不明である。10世紀頃のものであろう。

(5) 天林北遺跡（図版21の35、文献13・48）立山町岩峅寺字上ノ山

遺跡は南北2.5kmにわたる細長い高位段丘である天林段丘の北西に位置する。その北端部は栃津川によって削られ、さらに栃津川の支谷によって開析されて、2つの舌状台地となっている。遺跡中心部の標高は約260ｍを測る。水田化などの開発行為により遺跡の一部は消滅したが、かなりの部分は畑地や雑木林として残存している。

過去に縄文時代草創期の有舌尖頭器、早期から晩期の縄文土器片をはじめ、打製石斧、磨製石斧、小型磨製石斧、剥片石器、凹石、石皿、磨石、石錘、石匙、石錐、石鏃、玉類など、多数の遺物が採集されている。また後・晩期の特殊な石器として、石冠、石刀、独鈷石、小石棒、石棹なども採集されている。

今回の調査では、遺物散布状態と周辺の地形から、Ａ・Ｂ・Ｃの3地点を設定した（図版21の35Ａ・35Ｂ・35Ｃ)。

Ａ地点では、縄文土器341片、石器13点を採集し、そのうち縄文土器13片、石器7点を図示した（図版5の6～18・20～23、図版6の1～3)。

図版5の6は胴部破片であり、横に連続するＣ字形爪形文を2条表わし、左斜め下に縦方向に回転させたＲＬの縄文を施している。縄文時代前期の北白川下層Ⅱ式の影響を受けたものであろう。

7は胴部破片であり、半隆起線を横走させた下に木目状撚糸文を縦に施している。中期初めの新保式であろう。

8は胴部破片であり、半隆起線を2条横走させ、下の隆帯上には篦状工具により沈線をひく。その下には2条の半隆起線が横走する。中期中葉の天神山式であろう。

9は胴部破片であり、文様は半隆起線によるＢ字状文の一部であろう。区画内には正位の格子目文を施す。中期前葉の新崎式であろう。

10は胴部破片であり、ＲＬの縄文地文の上に横に2条の半隆起線を施し、その間は磨消して

無文帯としている。

11は口縁部破片であり、地文に縦方向に回転させたＲＬの縄文を施し、口縁部に１条の沈線をひく。

12は口縁部破片であり、横方向に回転させたＲＬの縄文を施している。

13は胴上部破片であり、横方向に回転させたＬＲの縄文を施し、横に１条の半隆起線をひく。

14は胴部破片であり、沈線による区画文を施し、あとは磨消している。後期のものであり堀之内式系であろう。

15は胴部破片であり、土器内面に平行沈線をひき、１条目と３条目の沈線間に刻みを施している。内外面ともよく磨く。後期中葉の加曽利Ｂ式系のものであろう。

16は底部破片であり、底部外面に網代圧痕がある。

17は底部破片であり、底部外面に縄文ないし網代圧痕がある。

18は底部破片であり、底部外面に網代圧痕がある。

20～23は磨製石斧である。

20は刃部を欠損し、基部に加撃痕がある。残存長は7.1㎝、幅は4.4㎝、重さは136.2ｇ、石材は蛇紋岩である。

21は両刃であり、刃部・基部などを一部破損している。刃部に使用痕を残す。長さは5.6㎝、幅は3.0㎝、重さは26.6ｇ、石材は蛇紋岩である。

22は基部破片であり、残存長は2.5㎝、幅は2.7㎝、重さは12.0ｇ、石材は蛇紋岩である。

23は小型で両刃である。一部を破損し刃部に使用痕を残す。長さは3.6㎝、幅は1.5㎝、重さは5.2ｇ、石材は蛇紋岩である。

図版６の１・２は凹石である。

１は一部破損し、重さは324.4ｇ、石材は片麻岩である。

２は重さ248.2ｇ、石材は安山岩である。

３は敲石に転用した磨石であり、重さは261.4ｇ、石材は安山岩である。

なお図版５の24の石刀、25～27の石冠、図版６の４の石錘、６の石鋸は分布調査以前の採集品である。

図版５の24は石刀の把であり、残存長は11.7㎝、重さは174.0ｇ、石材は結晶片岩である。

25は底部の一部が破損し、重さは290.0ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）である。

26は頭部の一部が破損し、重さは118.6ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）である。

27は完形であり、重さは270.8ｇ、石材は蛇紋岩の可能性が高い。

図版６の４は打ち欠き石錘であり、長さは6.9㎝、幅は4.5㎝、重さは90.9ｇ、石材は安山岩である。なお石錘はこのほかに10点出土している。

６は片面刃部側の表面が剥離している。長さは16.9㎝、幅は7.2㎝、重さは700.0ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）である。

B地点では、縄文土器11片、石器１点を採集した。

C地点では、縄文土器９片、近世土器１片、石器３点を採集し、そのうち縄文土器１片、石器１点を図示した（図版５の19、図版６の５）。

図版５の19は胴部破片であり、横に２条の半隆起線をひき、その下に縦方向に回転させたＲＬの縄文を施している。

図版６の５は片刃の打製石斧であり、長さは10.9cm、幅は6.5cm、重さは147.0ｇ、石材は安山岩である。

(6) 天林南遺跡（てんばやしみなみ）（図版21の36、文献３・13・43・49）立山町横江字天林

遺跡は横江集落の北西500ｍ、常願寺川扇頂部の天林段丘（高位段丘）の西縁辺に位置し標高は約290ｍを測る。

1960・1961年頃、この段丘面の水田化工事の際に発見され、安田良栄氏により遺物の散布状況や包含状況が調査された。遺物は多数の枕状石、石錘、石鏃、石錐、剥片石器、打製石斧、磨製石斧、凹石、磨石、敲石、石皿、砥石に加えて、縄文時代中期中葉と後葉の土器片がある。

1966年には小島俊彰氏・安田良栄氏によって包含層確認調査が実施され、縄文時代早期、前期前葉、中期中葉の土器片が発掘された。

なお東側の浅い谷に面した付近からは後・晩期の遺物も採集されているため、遺跡はかなり広い地域・年代にわたることが明らかになっている。

今回の調査では、縄文土器899片・石器142点、土師器１片、越中瀬戸１片を採集し、そのうち縄文土器32片、石器29点を図示した（図版７の１～32・36～40、図版８・９）。なお図版７の33～35は分布調査以前の採集品である。

図版７の１は深鉢の胴部破片であり、楕円の回転押型文を施している。縄文時代早期のものであろう。

２は深鉢の胴部破片であり、横方向に条痕を施している。

３は胴部破片であり、内外面に条痕を施し、外面に瘤を貼付けている。

４は口縁部破片であり、つまみ出しにより口縁にそって一条の隆帯を施している。

５・６は口縁部破片であり、つまみ出しによって口縁にそって一条の隆帯を施している。４と同一個体のものであろう。

７は口縁部破片であり、外面には縦と右斜め下方向に条痕を施し、口唇部内面に貝殻腹縁文を施している。

８は粗製深鉢の口縁部破片であり、口縁部は内側に粘土帯を貼りつけて肥厚させており、縄文の圧痕を１条横走させた下に、横方向に回転させたＲＬの縄文を施す。後期のものであろう。

９はキャリパー状の口縁部破片であり、半隆起線により施文している。中期中葉の天神山式であろう。

10は口縁部破片であり、半隆起線と隆帯を施し、隆帯上には篦状工具による連続刻みを施し

ている。中期中葉のものであろう。

11は胴部破片であり、半隆起線を施し、1条の隆帯上に篦状工具により刻みを施している。

12は口縁部破片であり、口唇外面に櫛状具により連続刺突を施し、その下に縦方向に条痕を施している。

13は口縁部破片であり、縄文地文の上に口縁にそって沈線文を2条施している。

14は口縁部破片であり、半隆起線文を施している。中期前葉のものであろう。

15は口縁部破片であり、無文土器である。内外面ともよく磨いている。

16は頸部破片であり、篦状工具による沈線を施している。

17は胴部破片であり、半隆起線をひき、篦状工具による連続刺突を施している。中期中葉のものであろう。

18は胴部破片であり、半隆起線をひき、隆帯上には爪形文を施す。中期中葉のものであろう。

19は胴部破片であり、半隆起線文を施している。中期前葉の新崎式期から中葉の天神山式期のものであろう。

20は深鉢の胴上部破片である。半隆起線で施文されており、下には縦方向に回転させたRLの縄文を施している。中期前葉の新崎式であろう。

21は胴部破片であり、半隆起線と1条の隆帯を施している。

22は胴部破片であり、半隆起線の下に縦方向に回転させたRLの縄文を施している。中期前葉の新崎式期から中葉の天神山式期のものであろう。

23は胴部破片であり、篦状工具による沈線を施している。中期中葉の天神山式であろう。

24は深鉢の胴部破片であり、沈線を横方向に平行に施文し、沈線間に列点文を施している。後期のものであろう。

25は深鉢の胴部破片であり、右斜め下方向に条痕文を施している。

26・27は胴部破片であり、横方向に回転させたRLの縄文を施している。

28は胴部破片であり、半隆起線の下に横方向に回転させたRLの縄文を施している。

29は深鉢の胴部破片であり、横位の羽状縄文を施している。上帯はRL、下帯はLRである。

30は底部破片であり、31は外反気味にたちあがる浅鉢の底部破片である。

32は底部破片であり、半截竹管による縦方向の半隆起線を施す。中期前葉のものであろう。

33は浅鉢であり、口縁部はほぼ垂直にたちあがり、頸部に4単位の渦巻文をもつ。渦巻間には沈線により横長に区画し、櫛状工具による刺突を施す。『立山町史』では、この遺物は古屋敷出土とされているが、注記が天林であったため、天林南遺跡の遺物としてあげた。

34は須恵器椀Bであり、矮小化した高台がつく。底部外面に回転糸切り痕を残し、轆轤回転方向は左廻りである。10世紀初頭のものであろう。

35は須恵器椀Aであり、底部外面に回転糸切り痕を残す。轆轤回転方向は左廻りである。10～11世紀頃のものであろう。

36～40は磨製石斧である。

36は刃部を欠損して、長さは11.0cm、幅は4.2cm、重さは194.6ｇ、石材は安山岩である。

37は両刃であり、刃部に使用痕を残す。長さは6.5cm、幅は3.3cm、重さは53.2ｇ、石材は蛇紋岩である。

38は両刃であり、刃部の一部を欠損する。基部側にも刃をつけている。刃部には使用痕を残す。長さは6.7cm、幅は3.4cm、重さは48.8ｇ、石材は蛇紋岩である。

39は片刃の小型のものである。基部に加撃痕、刃部には使用痕を残す。長さは4.7cm、幅は3.0cm、重さは19.4ｇ、石材は蛇紋岩である。

40は片刃の小型のものである。長さは3.4cm、幅は1.9cm、重さは5.6ｇ、石材は蛇紋岩である。

図版８の１・２は凹石である。

１は片側表面の一部が剥離し、重さは838.0ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）である。

２は完形であり、重さは461.2ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）である。

３は磨石として使用した後、凹石に転用したものである。被熱して表面が剥離している。重さは336.0ｇ、石材は安山岩である。

４は磨石であり、重さは507.4ｇ、石材は安山岩である。

５～12は二次加工のある剥片である。

５は周縁部に二次加工を施す。長さは7.1cm、幅は5.2cm、重さは89.0ｇ、石材は半花崗岩である。

６は一側縁に二次加工を施し使用痕を残す。不定形削器とも言えるものであり、長さは5.1cm、幅は6.2cm、重さは42.0ｇ、石材は玉髄である。

７は一側縁に二次加工を施す。長さは6.3cm、幅は3.6cm、重さは28.4ｇ、石材は硅長石である。

８は一側縁に二次加工を施す。長さは4.8cm、幅は1.6cm、重さは4.6ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）基質である。

９は側縁一部に二次加工を施す。長さは4.1cm、幅は3.7cm、重さは10.8ｇ、石材は安山岩である。

10は一部に二次加工を施す。長さは5.2cm、幅は2.2cm、重さは13.2ｇ、石材は玉髄である。

11は側縁の一部に二次加工を施しており使用痕を残す。長さは7.1cm、幅は5.4cm、重さは63.6ｇ、石材は半花崗岩の可能性が高い。

12は側縁に二次加工を施している。長さは5.2cm、幅は3.7cm、重さは21.6ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）基質の可能性が高い。

図版９の１～６は打製石斧である。

１は片刃であり片面を自然面のまま残す。刃部には使用痕がある。長さは16.5cm、幅7.2cm、

重さは398.0ｇ、石材は第三紀安山岩である。

2は片刃であり、天林北遺跡で採集した基部と接合した。このことは後世に移動したものでないならば、縄文人の行動範囲を考えるうえで参考になるであろう。長さは17.0cm、幅7.5cm、重さは313.2ｇ、石材は第三紀安山岩である。

3は片刃であり、片面に自然面を残している。残存長は8.4cm、幅は7.7cm、重さ337.0ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）である。

4は片刃であり、片面に自然面を残す。残存長は9.3cm、幅は7.7cm、重さは202.4ｇ、石材は安山岩である。

5は刃部を欠損して、片面には自然面を残している。残存長は12.4cm、幅は6.2cm、重さは209.4ｇ、石材は安山岩である。

6は片刃であり、長さは12.4cm、幅は5.0cm、重さは137.8ｇ、石材は安山岩である。

7は横型石匙であり、長さは3.6cm、幅は5.1cm、重さは15.6ｇ、石材は硅長石である。

8は石鏃未成品または石錐の一部である。長さは2.3cm、幅は2.2cm、重さは2.8ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）基質である。

9は二次加工を施す剥片であり、片側側縁を加工する。長さは3.0cm、幅は2.1cm、重さは6.2ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）基質である。

10・11は凹基無茎石鏃である。

10は長さ2.1cm、幅は1.4cm、重さは1.2ｇ、石材はチャートの可能性が高い。

11は片側基縁を一部欠損する。長さは1.8cm、幅は1.0cm、重さは0.4ｇ、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）基質である。

12は玦状耳飾の破片である。重さは8.4ｇ、石材は滑石である。

(7) 千垣奥薬遺跡（図版22の37、文献13）立山町千垣字奥薬

遺跡は千垣集落の西方400ｍ、石英斑岩の堅い岩質が基盤に分布し、常願寺川に対して舌状に突出した地形となっている中位段丘面上に位置する。標高は約300ｍを測る。

過去に半截竹管文と爪形文のある隆起帯を組み合わせた土器片や、粗製土器、条痕文・無文・波状口縁の土器が採集されている。石器では火山岩製の磨製石斧が採集されている。これらのことから当遺跡は縄文時代中期中葉を主体とする遺跡と推定される。

今回の調査では、縄文土器85片、越中瀬戸5片、不明6片、型入れ土製品1点を採集し、そのうち縄文土器6片を図示した（図版11の8～13）。

8は口縁部破片であり、口縁部内側に浅い沈線を横位に3条施す。口縁部外側には横位に2条、その下には斜位に5条ずつ交互に方向を変えて沈線を施し、その間には三角形の無文部を残す。その下には沈線を横位に施す。

9は「く」字状に屈曲し外反する頸部破片であり、頸部に2条の半隆起線を横方向に施文する。その間には縦方向に半隆起線をめぐらした後、三角形の削り取りを施して変形した連弧状

文をつくる。

10・11は口縁部破片であり、同一個体のものであろう。横方向に回転させた粒の小さいＬＲの縄文を施す。器面外面を赤彩している。

12は胴部破片であり、平行沈線を施している。

13は胴部破片であり、横方向に回転させたＬＲの縄文を施している。

(8) 門の本割遺跡（図版22の38、文献13）立山町芦峅寺字門の本割

遺跡は芦峅寺段丘面の一部に位置し、標高は約380ｍを測る。

立山小学校の東側に隣接する富山営林署芦峅寺苗畑事業所の圃場が、遺物の散布地であったが、過去の調査では圃場整備が行き届いていたため、散布する遺物は極くわずかであった。縄文土器片、磨製石斧、砥石などが採集されているが、資料が充分でないため、時代等は明らかになっていない。

今回の調査では、珠洲の甕３片、越中瀬戸12片を採集した。

(9) 野口遺跡（図版22の39、文献13・22）立山町芦峅寺字野口

遺跡は芦峅寺集落の東端部にあり、古屋敷段丘より一段高い芦峅寺段丘面（中位段丘面）に位置している。常願寺川の支流である姥堂川が、この段丘を切って流れている右岸にあり、標高は約420ｍを測る。

1969年に『風土記の丘』の建設事業が進められていた過程で発見され、調査によって縄文時代中期中葉の土器片と、石匙、石錘、磨製石斧、凹石、磨石などの石器が出土した。

なお今回の分布調査では遺物を採集できなかった。

（大場裕之・酒井聖子・森秀典）

(10) 不動平遺跡（図版22の40Ａ・Ｂ、文献13）立山町芦峅寺字不動平

遺跡は芦峅寺集落の東方約１㎞、常願寺川の右岸、不動山の南西斜面、山頂平坦部から山腹にかけて位置する。不動山の山頂平坦部と斜面をＡ地点、不動山の裾野の平坦部地域をＢ地点とした。不動山山頂部の標高は約620ｍ、裾野平坦部の標高は約427ｍを測る。

遺跡は1965年のスキー場造成中に発見され、山頂平坦部からは縄文時代中期末葉から後期にかけての土器、打製石斧、磨製石斧未成品が、標高約480ｍの山頂平坦部端からは、縄文時代後期の土器、打製石斧などが出土している。

不動山山頂部の現在の植生は、暖温帯から冷温帯に移行する落葉広葉樹林帯に属する。この遺跡では現在は山の斜面に遺物が散布し、山頂部から流されたものでなければ、Ａ地点斜面部は縄文時代中期から後期にかけての季節的キャンプサイトである可能性が高い。富山県内では、このような高地における縄文遺跡の発見例は少なく不明な点が多い。

今回の調査では、縄文土器200余片と打製石斧２点、磨製石斧刃部破片１点、石鏃２点、土師器皿、珠洲甕各１点、越中瀬戸６片を採集した。そのうち縄文土器５片（図版10の１～５）と石器（図版10の８～12）を図示した。なお図版10の６・７は1965年の調査の際の出土品のう

ち未報告のものである。

1・2は無文土器の口縁部破片である。1は胎土内に繊維を含み、器面内側には炭化物が、外側にはススが付着している。2は口縁部を外側に折り返し、器面内外を磨いている。

3は胴部破片であり、縄文地の上に半截竹管による沈線を2条横方向に施す。

4は口縁部破片であり、縄文を施したあと、半截竹管による沈線で区画し、部分的に磨消す。口唇部に縄文を押圧しており、口縁内側には半截竹管による沈線を1条表わす。縄文時代後期に属するものであろう。

5は口縁部破片であり、横方向に条痕を施す。

6は口縁部破片であり、口縁部に貝殻腹縁文を配し、その下には半截竹管による沈線を施す。口縁部内側には沈線を1条めぐらす。

7は波状口縁深鉢の口縁部破片であり、口縁部と波頂部から垂下する隆起線上には貝殻腹縁文を刻み、その下には半截竹管による沈線で区画を施す。

6・7は縄文時代中期後葉の串田新式にあたり、6の沈線文は工字状文の一部ではないかと推定できる。

8・9は凹基無茎石鏃である。8は片側基縁を一部欠損する。長さは2.1cm、幅は1.5cm、重さは1.2g、石材は玄武岩である。9は細身のものであり側縁がやや鋸歯状になっている。長さは2.0cm、幅は1.2cm、重さは0.6g、石材は石英斑岩（濃飛流紋岩）基質である。

10は磨製石斧の刃部破片である。両刃であり、使用痕を残す。重さは6.0g、石材は蛇紋岩である。

11・12は打製石斧である。11は基部を欠き両刃である。残存長は11.3cm、幅は7.7cm、重さは300.8g、石材は安山岩である。12は片刃であり、長さは10.4cm、幅は5.6cm、重さ76.2g、石材は安山岩である。

(11) **仲宮寺遺跡**（図版22の41、文献13・14・30）立山町芦峅寺字堂ノ後割

遺跡は芦峅寺集落の東方約300mに位置し、標高は約390mを測る。

仲宮寺は古くは菩峅寺と称したのち、立山仲宮寺となり、江戸時代には芦峅寺と呼ばれた。『立山略縁起』には、大宝二年慈興が立山を開山し、芦峅を入定の地と定め、媼堂、講堂、両宮、閻魔堂、仁王門、地蔵堂、鐘楼堂などを造立し立山仲宮寺と唱したとある。

仲宮寺の中心は現在の雄山神社中宮地内であったらしいが、立山の登山者の増加につれて東に移転し、鎌倉時代頃には他の寺院をもあわせて堂塔を整備した。古来、芦峅寺集落は越中から信濃、飛騨へ抜ける交通の要所であり、室町時代から戦国時代にかけては寺嶋氏の保護・支配を受け、更に江戸時代には加賀藩の支配下に入った。

明治元年、神仏分離令が発布されると、仲宮寺では大宮、若宮以外の堂塔は取り払われた。しかし閻魔堂だけが取り払いがおくれて残り、大正15年には媼堂、講堂が再建され、のち講堂は祈願殿と名を改め、現在も雄山神社中宮の一画に残っている。

今回の調査では，珠洲すり鉢・甕各１片、越中瀬戸皿93片を採集し、珠洲甕１片、越中瀬戸１片を図示した（図版11の16・21）。

16は珠洲の甕の胴部破片であり、外面には粗い平行叩きを施し、内面にはあて具痕が残る。吉岡康暢氏のいう珠洲Ⅲ期[47]以降（13世紀末以降）にあたるものであろう。

21は無釉の越中瀬戸皿Ａである。体部内外面と底部内面に回転撫でを施し、底部外面には糸切り痕が残る。轆轤回転方向は右廻りである。越中瀬戸としては珍しい製品であるが、この地点（近世墓地）に多数散布することから、祭祀具と推測できる。

⑿ **古屋敷（ふるやしき）Ⅲ遺跡**（図版22の42）立山町芦峅寺字古屋敷

遺跡は仲宮寺遺跡の南東約300ｍ、常願寺川右岸に張り出した中位河岸段丘上に位置し、標高は約395ｍを測る。

今回の調査で縄文土器４片と磨製石斧１点（図版11の４）を採集し、新たに古屋敷Ⅲ遺跡と名付けたものである。

４は磨製石斧の基部破片であり、片側表面が一部剥離している。残存長は4.2cm、幅は4.2cm、重さは70.2ｇ、石材は蛇紋岩である。

⒀ **古屋敷（ふるやしき）Ⅱ遺跡**（図版22の43）立山町芦峅寺字古屋敷

遺跡は古屋敷遺跡の西方約250ｍ、常願寺川右岸に位置し、標高は約410ｍを測る。

以前に多数の縄文土器が採集されており、今回の調査に際して新たに古屋敷Ⅱ遺跡と名付けたものである。今回の調査では近世の青磁１片を採集したのみであった。

⒁ **古屋敷（ふるやしき）Ⅰ遺跡**（図版22の44、文献13・31・32）立山町芦峅寺字古屋敷

遺跡は芦峅寺集落の東方約１km、志鷹神社周辺に存在し、常願寺川右岸に張り出した中位河岸段丘上に位置する。標高は約405ｍ、常願寺川の現在の河床との比高は約50ｍを測る。

当地では以前から縄文時代中・後期の遺物が採集されており、1964年・1984年・1985年と３次の発掘調査がおこなわれている。1964年の調査では、縄文時代中期前葉～末葉の土器、打製石斧、磨製石斧、石錘、石鏃、凹石、磨石、玉が、1984年の調査では、縄文時代中期～後期の住居跡７、土坑６、貼り床３、縄文土器・石器が、1985年の調査では、弥生時代後期の土器が出土している。

この遺跡では縄文時代中期前葉から後期にかけての土器がほぼ連続して発見されており、長い間、居住地として利用されたものと考えられる。また遺跡の検出面は、現在の地表より50～150cm下とかなり深い。現在、遺跡は『立山風土記の丘』地内に含まれ、杉林となっている。

今回の調査では、縄文土器20数片、磨製石斧１点を採集し、そのうち縄文土器１片と石器１点を図示した（図版10の20、図版11の３）。図版10の13～19・21～30、図版11の１は、1964年の調査の際の出土品である。『立山町史』上巻に一部紹介してあるが、未紹介のものを含めて改めて報告する。また図版11の２は、1985年の調査の際の出土品で未報告のものである。

13は有孔鍔付土器の口縁部破片である。鍔の　面には粘土紐をジグザグ状に貼りつけており、

外面に赤彩している。縄文時代前期末葉のソーメン貼り手法を持ち、朝日下層式のものと考えうる。

14は深鉢の口縁部破片であり、口唇部は粘土紐を貼りつけ肥厚させている。爪形文を刻んだ隆帯を口縁に1条めぐらし、そこから「し」の字状の隆帯を下す。半隆起線によって作られた無文帯には半截竹管による刺突を施す。縄文時代中期中葉天神山式の古期に属するものである。

15はキャリパー状波状口縁深鉢の口縁部破片である。口唇には玉抱き三叉文を刻み、口縁部には半隆起線を施す。波頂部の下には「8」の字状の突起を付け、この突起からは隆帯が下方にのびている。

16は口縁部破片であり、口唇には玉抱き三叉文を刻む。口縁部には爪形文を刻んだ隆帯を逆「し」の字状に、半隆起線を渦巻状に施す。隆帯は上部が欠けており、器面外は赤彩する。

17・18は浅鉢の口縁部破片である。17は口縁部には隆帯により、渦巻文と楕円区画を作る。楕円区画の内側にそって半截竹管による沈線を施し、区画内には篦状具により連続して刻み目を施す。内外面共に丁寧に磨いている。18は口縁部に隆帯によって円と楕円の区画を作り円の区画内には口唇より「し」の字状文を下し、楕円の区画内には貝殻腹縁による連続刺突を施す。隆帯の基部には半截竹管により沈線を施している。

19は「く」字状に屈折した口縁部破片であり、半隆起線を横位に施し半円状の突起をつける。

20は口縁部の破片である。口縁部には爪形文を刻んだ半隆起線を横位に1条めぐらし、その下には太い半隆起線を縦位に施す。器面外部は一部剥離しており、器内には炭化物が付着している。

21はU字状波状口縁部の破片であり、波頂部を肥厚させている。口縁部には隆帯を口縁端にそってめぐらし、波頂部の下では円形の区画を作る。隆帯上には貝殻腹縁によると推測する刺突を施し、また隆帯の基部には半截竹管による沈線をめぐらす。波頂部両側の口唇部には1条の沈線を施し、口縁内側にも口縁にそって沈線をめぐらす。縄文時代中期後葉串田新式に属するものであろう。

22は口縁部破片であり、渦巻文と楕円区画を作る。楕円区画の内側にそって半截竹管による沈線を施す。区画内には櫛状具により連続刺突を施し、口唇部、器面内面を磨く。縄文時代中期中葉の天神山式ないし古府式であろう。

23は口縁部破片である。地文に縄文を施し、半截竹管を浅く引いた横方向の半隆起線を口唇部には1条、口縁部には2条施し、更に半隆起線で楕円を作る。器面内面に赤彩を施す。

24は胴部破片であり、半截竹管による浅い沈線を2条めぐらし、その下には貝殻腹縁を連続して刺突する。恐らく工字文の一部分であり、縄文時代中期後葉の串田新式に属するものであろう。

25はU字状波状口縁深鉢の口縁部破片であり、口唇部に粘土紐をはりつけ波状口縁を作っている。口縁部には口縁にそってLRの縄文原体を1条、あるいは2条押圧する。その下には、

横方向に回転させた縄文を配し、口縁端部には撫で調整を施す。波頂部の内面には山形の抉り込みを施す。

26は深鉢の口縁部破片であり、口縁上端に半円形の把手を付け、内外面を丁寧に磨く。内面は部分的に黒変しており、器外にはススが帯状に付着している。

27は胴部破片であり、半隆起線により縦に区画しその間に半隆起線による蛇行懸垂文を施す。

28は胴部破片であり、縦方向に狭い間隔で微隆起線を施す。縄文時代中期後葉最末期の岩峅野式[27]のものであろう。

29・30は口縁部破片であり、29は口縁部に篦状工具による密な連続刺突を横位に1条施し、その下には棒状施文具による三角形連続刺突文を横位に1条、更にその下には縦位に平行に施す。30は頸部に横位に2条、三角形連続刺突文を施す。いずれも縄文時代後期前葉気屋式に属するものであろう。

図版11の1は縄文時代中期前葉の新崎式の深鉢であり、口縁部径25.5cm、復原高35.5cmを測る。口縁部の入字状突起は土器の1/3が現存しないため不明であるが反対側にも突起があったであろう。文様は4単位で構成する。口縁部は無文帯であり頸部には半隆起線を3条めぐらし胴部には地文として横方向にRLの縄文を施す。その上には半隆起線によって半円や長方形の区画を作っている。半円の内には半隆起線による「し」の字状文を施し、長方形の区画からは、B字状文の原型となる半隆起線を下している。底部付近は文様を施さず無文のままである。

2は弥生土器の甕の口縁部破片であり、口頸部内外面に横撫で、体部内面に削り、体部外面にはおそらく刷毛目を施す。弥生時代後期のものと推定できるが、吉峰～芦峅寺段丘で知られる唯一の弥生・古墳時代遺物である。当期に本格的な集落が存在したかどうかは今後の課題であるが、存在してもごく例外的なものと推測する。

3は磨製石斧であり、刃部の一部を欠く。刃部に使用痕を残し、長さは12.5cm、幅は5.0cm、重さは249.4g、石材は蛇紋岩である。

⑮ 芦峅寺城跡（あしくらじ）（図版22の45、文献10）立山町芦峅寺

城跡は常願寺川の右岸、来拝山から南に伸びた尾根上に存在する。標高は最高所で約620m、最低所で約450mを測り、標高差は約170mに達する。

1984年に地元の芦峅寺に住む佐伯定芳氏によって発見され、翌1985年、高岡徹氏によって踏査された結果、巨大な空堀を持つ山城であることが確認された。

高岡氏の報告によると、遺構は来拝山の芦峅寺集落に向かう尾根上に約900mにわたって9箇所の郭と8箇所の空堀を連ねている。城は尾根の最高所に位置し、芦峅寺城の主郭であったと推測できる東西30m、南北110mを測る郭をはじめとして、階段状連郭形式とでもいうべきものを形成している。上市町の柿沢城と基本的には同じ形式のものである。また主郭と推測した郭のすぐ東側に位置する空堀は、幅22m、深さ9m、長さ50mを測り、中世山城としては有数の規模を持つものである。

芦峅寺は古くより立山信仰の拠点として多くの人を集めたところであり、芦峅寺に存在した仲宮寺の衆徒組織の勢力も中世の戦国武将たちにとって見過ごすことのできないものであった。またこの地は越中から山越えに信濃、飛騨へ抜ける交通の要地でもあった。室町・戦国時代に芦峅寺を支配したのは寺嶋氏である。寺嶋氏は当時、射水・婦負二郡の守護代であった神保氏の重臣であり、文明年間（1469～1487年）より神保氏の意を受けて芦峅寺を支配している。築城年代もその頃であろうと考えられるが、現状のように整備された年代はこれより降る可能性が高い。寺嶋氏は白岩川上流左岸の池田城（現立山町池田）を居城とし、池田城から尾根ぞいに来拝山を経て出城の芦峅寺城に至り、芦峅寺集落を支配したのであろう。

芦峅寺城の周辺には、常願寺川の対岸に中地山城跡や、その出城と考えられている小見城跡、1984年に発見された原砦跡等の中世の山城跡が存在する。この三城砦はいずれも飛騨の江馬氏の出城であり、当時、常願寺川をはさんでの寺嶋氏と江馬氏の二勢力の対峙関係があったことを推測できる。

なお現在この地は森林となっているため遺物は採集できなかった。

⑯ **雄山神社中宮**（おやまじんじゃちゅうぐう）（図版22の46、文献13・14・39）立山町芦峅寺二番地鎮座

雄山神社中宮は芦峅寺集落のほぼ中央に位置し、標高は約410 mを測る。

明治以前は現在の大宮、若宮講堂、開山堂を中心とする一帯と、閻魔堂、媼堂、仁王門を中心とする一帯を総称して、立山仲宮寺あるいは雄山権現と呼んでいたが、明治元年の神仏分離令によって雄山神社中宮と呼ばれるようになった。

雄山神社は平安時代にはすでに立山信仰の拠点として存在していたらしく、『延喜式』巻第十に越中国の神社として新川郡のなかに雄山神社の名がみえる。

雄山神社は、立山山頂の峰本社、芦峅寺の中宮社、岩峅寺の前立社壇が三社一体としてあり、祭礼も三社合同で取り行なう。立山に立山本宮、芦峅寺中宮、岩峅寺前宮という三社配置は鎌倉時代以前にすでに成立していたのではないかと考えられ、芦峅寺中宮には平安末期の不動明王などを蔵し、また立山本宮では木彫神像が、岩峅寺では鎌倉末期とみられる阿弥陀如来像などが発見されている。

雄山神社中宮の社殿は、大宮、若宮、祈願殿に分かれ、祭神には伊邪那岐命（いざなぎ）、手力雄命（たぢからお）をいただく。若宮の社殿は境内に残る最古の建築物であり、現在は鞘堂の中に納められている。祈願殿は以前は仲宮寺の講堂と呼ばれていたものであるが、明治期になって取り壊され、のち祈願殿として修復され再建されたものである。

周辺には仲宮寺跡や布橋、媼堂などの立山信仰遺跡が残されており、また1972年に完成した立山風土記の丘資料館には、立山信仰に関する資料や民俗資料などが展示されている。

なお今回の調査では、この付近ではほとんど遺物を採集できず、聖地であることの一端をうかがえる。

⑰ **善道坊**（図版22の47、文献13・30）立山町芦峅寺

善道坊は芦峅寺集落のほぼ中央、常願寺川右岸に位置し、標高は約410ｍを測る。

善道坊は伸宮寺に仕える衆徒の僧坊の一つである。伸宮寺の奉仕者は、衆徒・社人と呼ばれ一山会という組織によって動いていた。その衆徒・社人の員数は『一山会文書』によると享和元年（1801年）に、衆徒33坊、社人５人と定められている。彼らは僧侶であるとともに、天台系の修験者でもあり、村人の指導者ともなって政治的にも権力を握り、一山会全体の土地をも保持し、それは明治初年まで続く。

衆徒は農閑期になると「諸国壇那回り」と称する布教に出て、信者を立山に誘いつつ自坊での宿泊を勧めた。その布教活動の範囲は日本全国にわたり、また坊家毎に布教の担当区域は世襲的に決まっていた。善道坊は代々三河を担当している。なお現在の善道坊の建物は現存する唯一の近世宿坊建築物である。

なお今回の調査では付近から中・近世の資料を採集した（図版11の14・15・17・18・22）。

14・15は珠洲のすり鉢の口縁部破片であり、内外面に回転撫でを施す。口縁部端面は平坦面を形成し外方にやや肥厚する。17・18は珠洲の甕の胴部破片である。外面には粗い平行叩きを施し、内面にはあて具痕が残る。珠洲Ⅲ期以後（13世紀末以降）にあたるものであろう。

22は中国製の竜泉窯系青磁椀である。胎土は極めて精良であり、厚い釉には気泡がある。底部外面は露胎である。15世紀頃のものであろう。これは分布調査で採集した唯一の中国製磁器であり、採集地点が立山信仰のための宿坊として栄えてきたことを示しているのであろう。

⑱ **その他**

遺跡として設定した地区外の採集品である（図版11の５～７・19・20・23・24）。

５～７は縄文土器の胴部破片である。

５は第４地区で採集したものであり、木目状撚糸文を施している。縄文時代中期初葉新保式に属するものであろう。

６・７は第19地区で採集したものである。６は木目状撚糸文を施し、その上に縦方向に平行沈線を施す。縄文時代中期初葉新保式であろう。７は上部には半隆起線を横位に１条施し、その下には沈線をジグザグ状に施す。

19は第29地区で採集したものである。須恵器杯Ｂ底部であり、底部外面に撫で、底部内面と体部内外面に回転撫でを施す。９世紀頃のものであろう。

20は第５地区で採集した土師器皿Ａである。非轆轤製の製品であり、13～14世紀頃のものであろう。

23・24は第19地区で採集したものである。23は薄い鉄釉をかける越中瀬戸のおろし板である。24は黒く発色する鉄釉をかける越中瀬戸の椀であり、口縁がほぼ直立するものである。

（沢辺利明・酒井聖子・森秀典）

石器の石材について ： 今回の調査で採集した石器と剥片の石材は以上に示したとおりであるが、石器の種類と石材の関係についてまとめておく。

藤井昭二氏の鑑定によると、打製石斧は安山岩製９点、石英斑岩（濃飛流紋岩）製１点、磨製石斧は蛇紋岩製11点、安山岩製１点、凝灰岩製１点であり、石鏃は石英斑岩製３点、玉髄１点、チャートの可能性があるものが１点あり、石匙は硅長岩製、石錘は安山岩製である。また凹石は安山岩製２点、石英斑岩（濃飛流紋岩）製２点、片麻岩製１点であり、磨石は２点とも安山岩製である。石冠は２点が石英斑岩（濃飛流紋岩）製、１点が蛇紋岩の可能性があるものであり、石刀は結晶片岩製、玦状耳飾は滑石製、石錐は石英斑岩（濃飛流紋岩）製である。剥片には石英斑岩（濃飛流紋岩）基質製、玉髄製のものが各２点、安山岩製、石英斑岩（濃飛流紋岩）基質の可能性があるもの、半花崗岩製、半花崗岩の可能性があるものが各１点ずつある。

以上から判るように、安山岩は最もよく使用した石材である。特に打製石斧のほとんどは、この安山岩を用いている。また磨製石斧では蛇紋岩製のものが特に多く、磨製石斧以外で蛇紋岩を用いる石器は、その可能性がある石冠１点のみである。打製石斧と磨製石斧は、用途の違いに適した石材の選択を行なったのであろう。なお凝灰岩製磨製石斧１点は縄文前期のものと推定できる。石英斑岩（濃飛流紋岩）基質は、石鏃をはじめ、凹石、石冠に多く用いている。また凹石、磨石、石錘という礫石器には安山岩が多いが、石英斑岩、片麻岩等もあり、手頃な大きさの石を用いたのであろう。剥片や二次調整をもつ剥片には、石器に使用するいろいろな石材がみられるが、半花崗岩のみは定型的な石器に用いた例がない。

これらの石器の石材は、主として近くに産地を有するものを用いている。しかし石鏃に使用されている可能性があるチャートは、この付近にはない石材である。また石刀に用いた結晶片岩は、宇奈月町付近で産するものである。

以上のことから、ほとんどの石器は身近にある石材を、用途に応じて、ある程度選択して使用していたのであり、少量の石材ないし石器は移動した可能性がある。　　（酒井聖子）

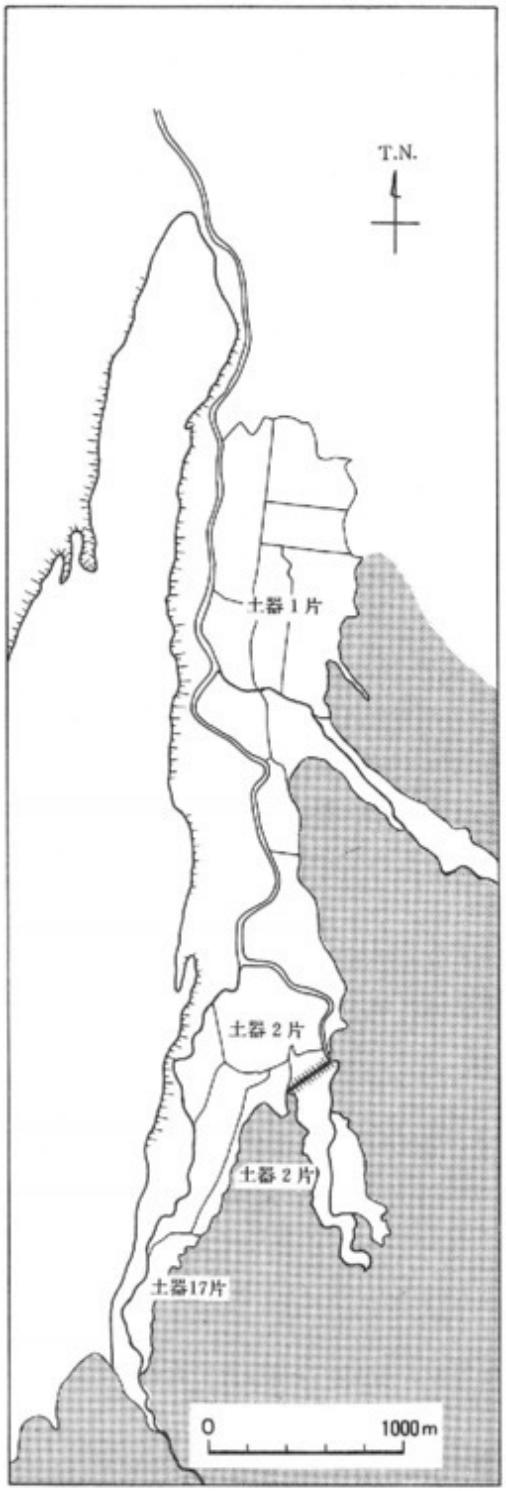
2　遺物の散布状態（第９～20図）

1986年度の分布調査により、2048片・42.1個体分の資料を採集したが、その内容は縄文時代1751片・38.2個体分（土器1714片・1.2個体分、石器37点・37個体）、弥生～古墳時代なし、古代20片・口縁部なし、中世53片・0.3個体分、近世224片・3.6個体分である。ここでは各地区毎にその散布状態について示すことにしよう。

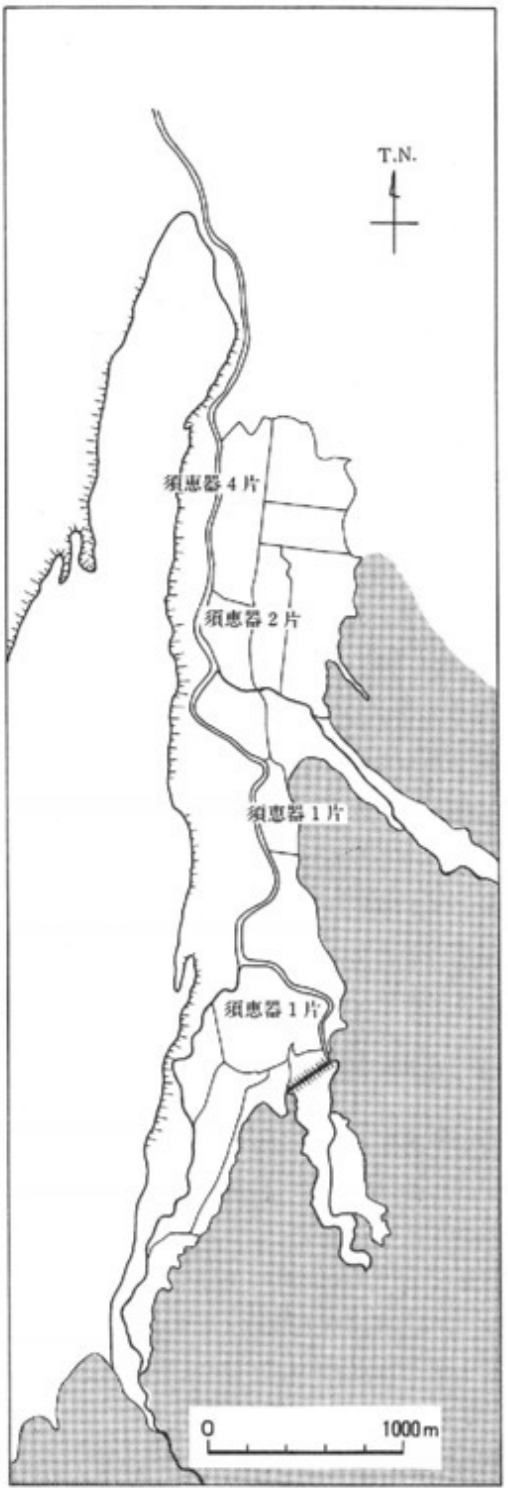
(1)　II１地区の散布状態（第９～12図）

II１地区は標高約50～170ｍを測り、大部分が氾濫原、一部が河岸段丘である。ここでは88片・0.8個体分の遺物を採集した。

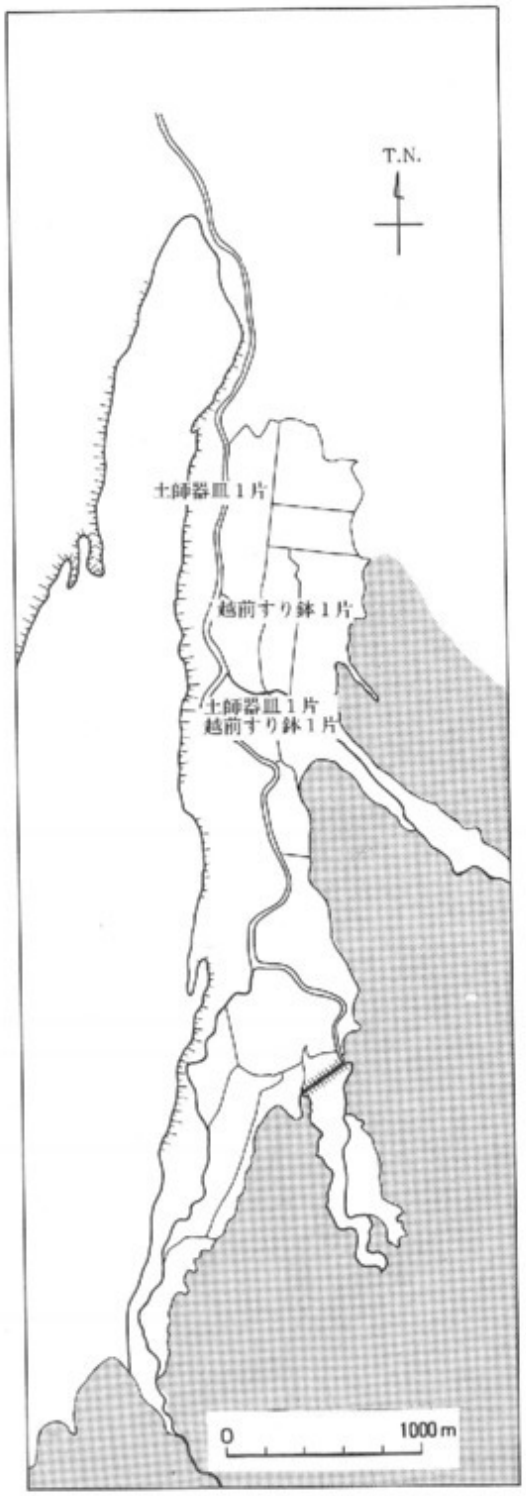
縄文時代の遺物は土器22片・口縁部０である（第９図）。その多くは地区南の河岸段丘の付近であり、氾濫原では細片３片を採集したのみである。年代が不明の小片が多い。



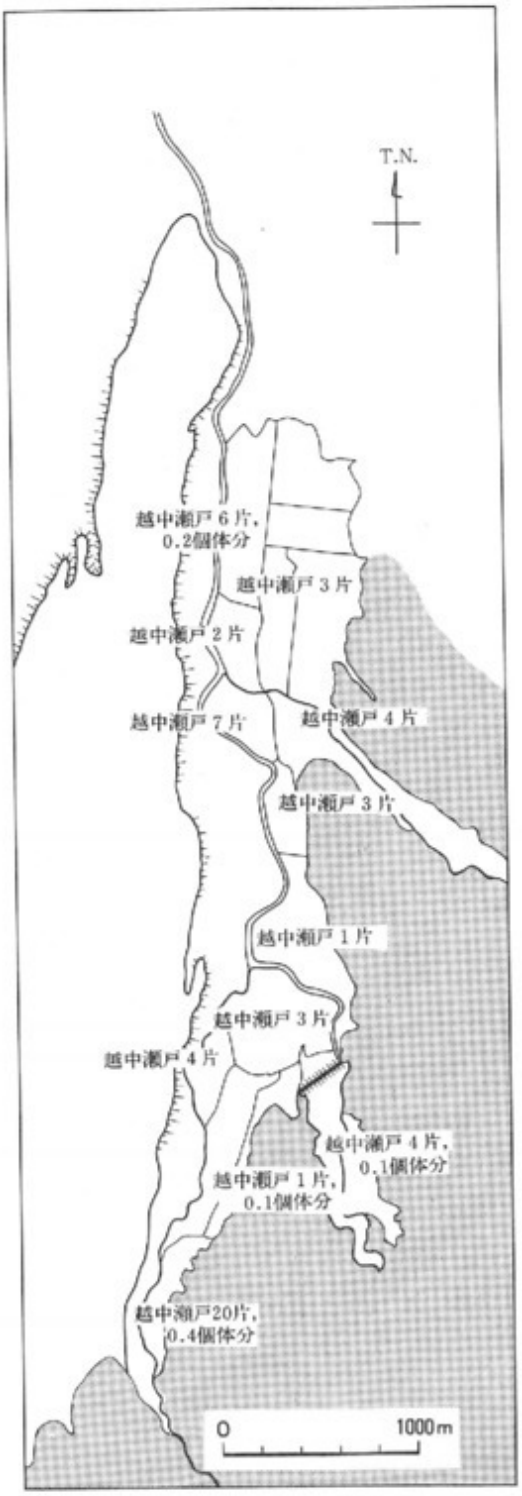
第9図　II 1 地区縄文時代遺物の散布状態



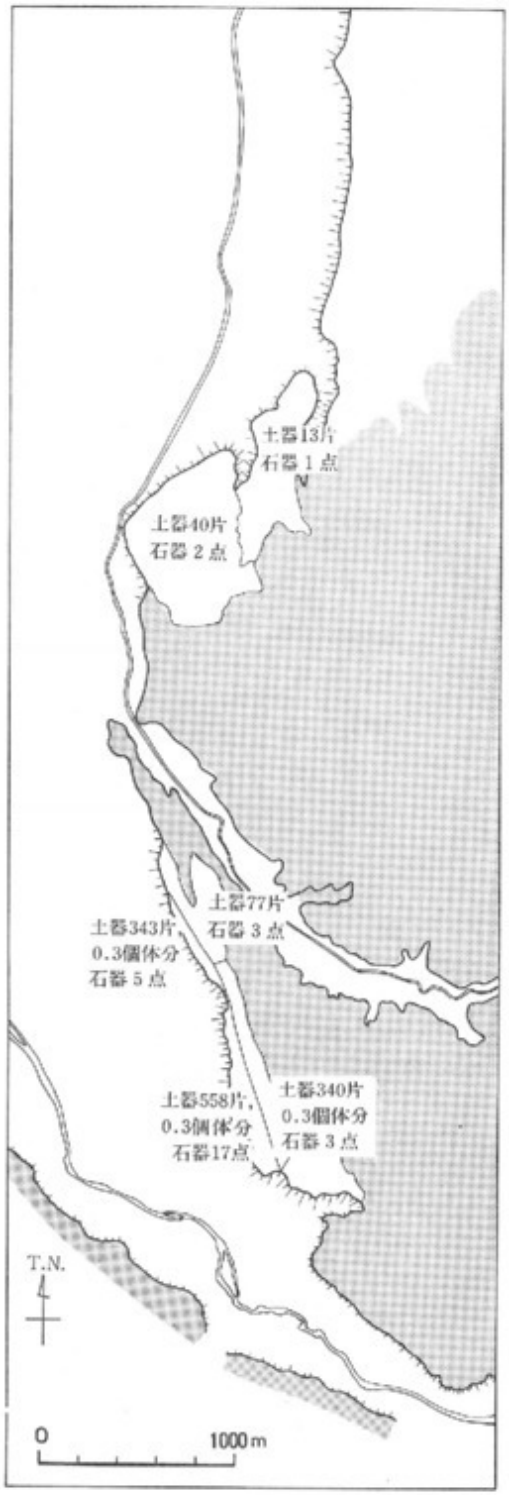
第10図　II 1 地区古代遺物の散布状態



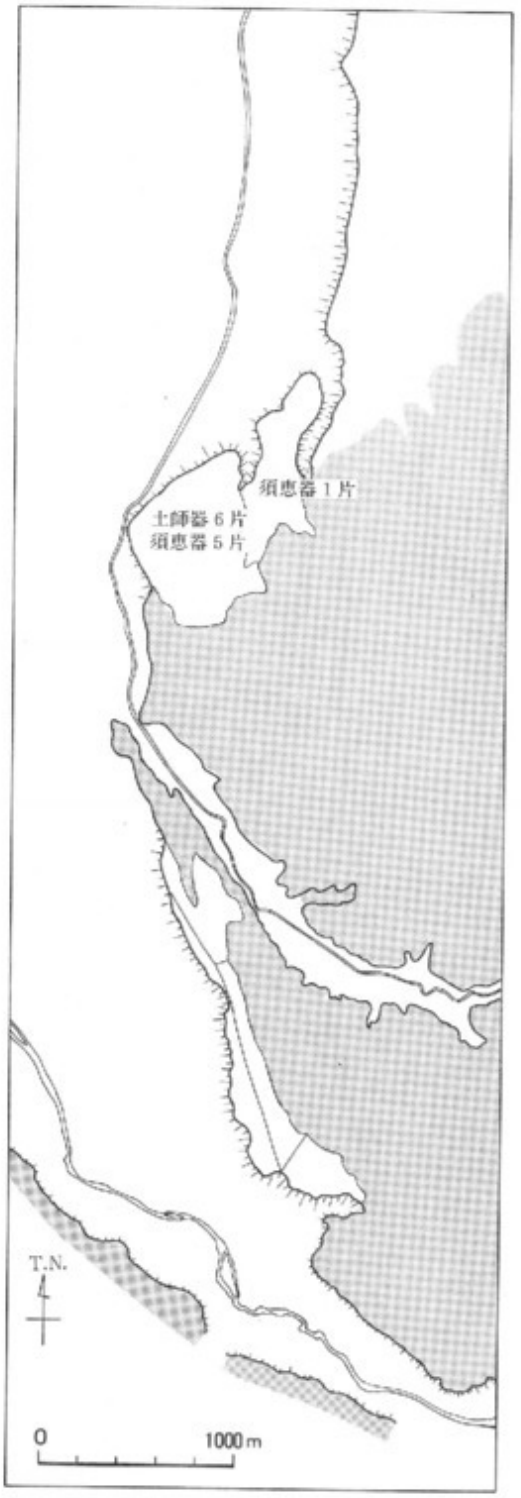
第11図　II 1 地区中世遺物の散布状態



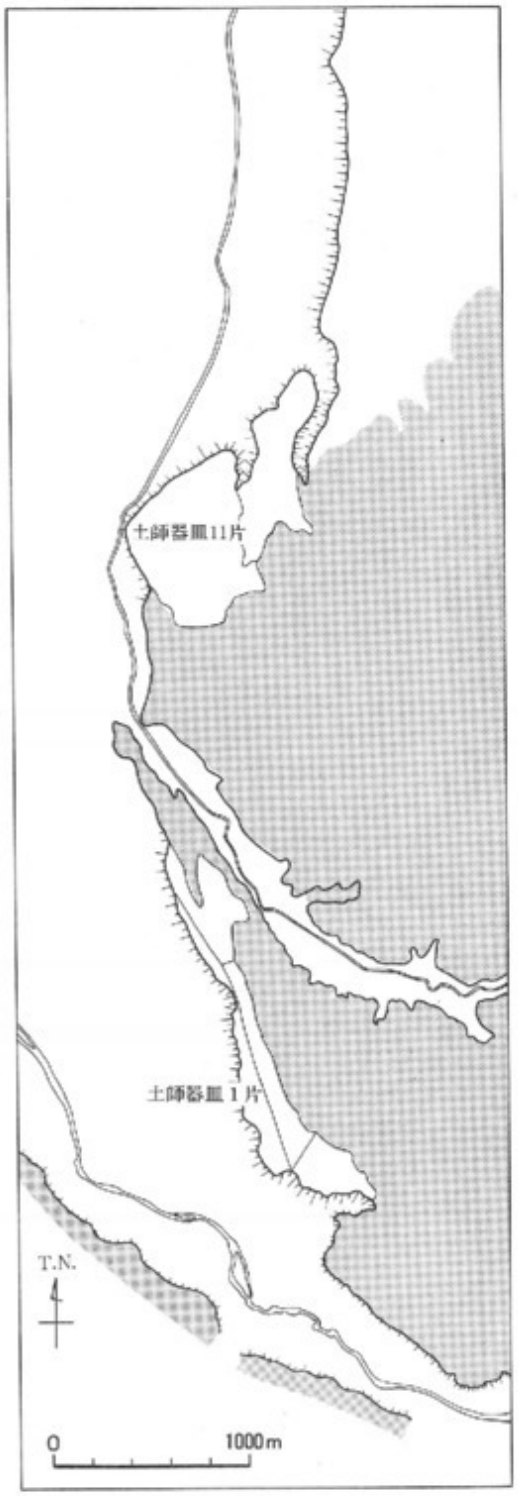
第12図　II 1 地区近世遺物の散布状態



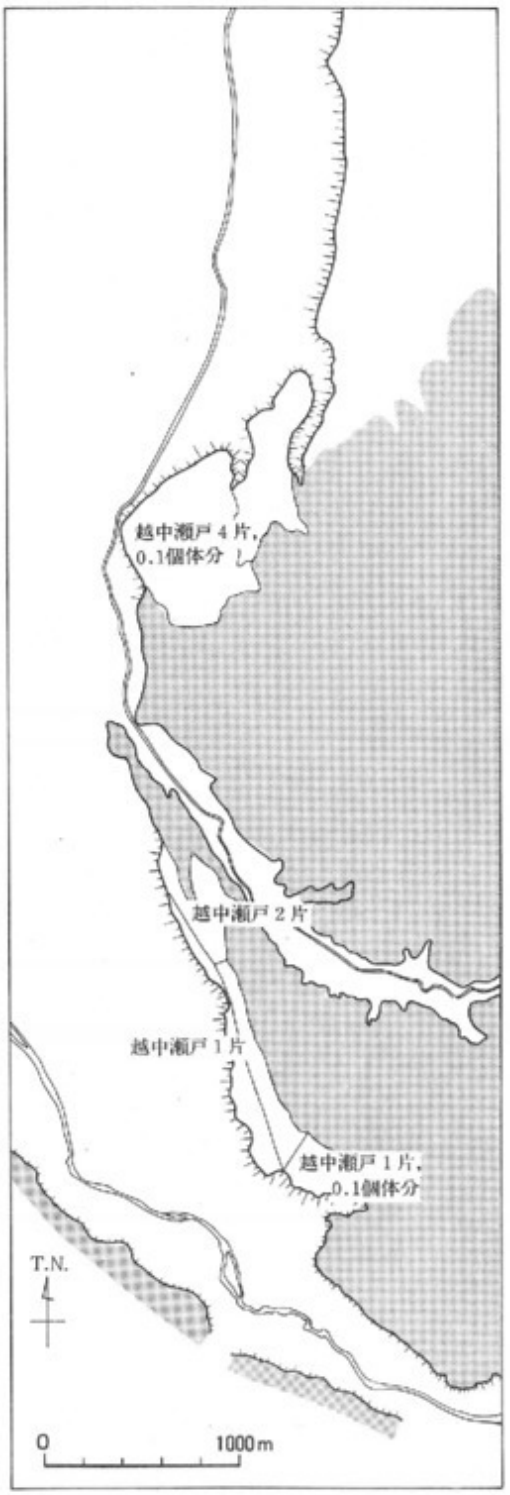
第13図　II 2 地区縄文時代遺物の散布状態



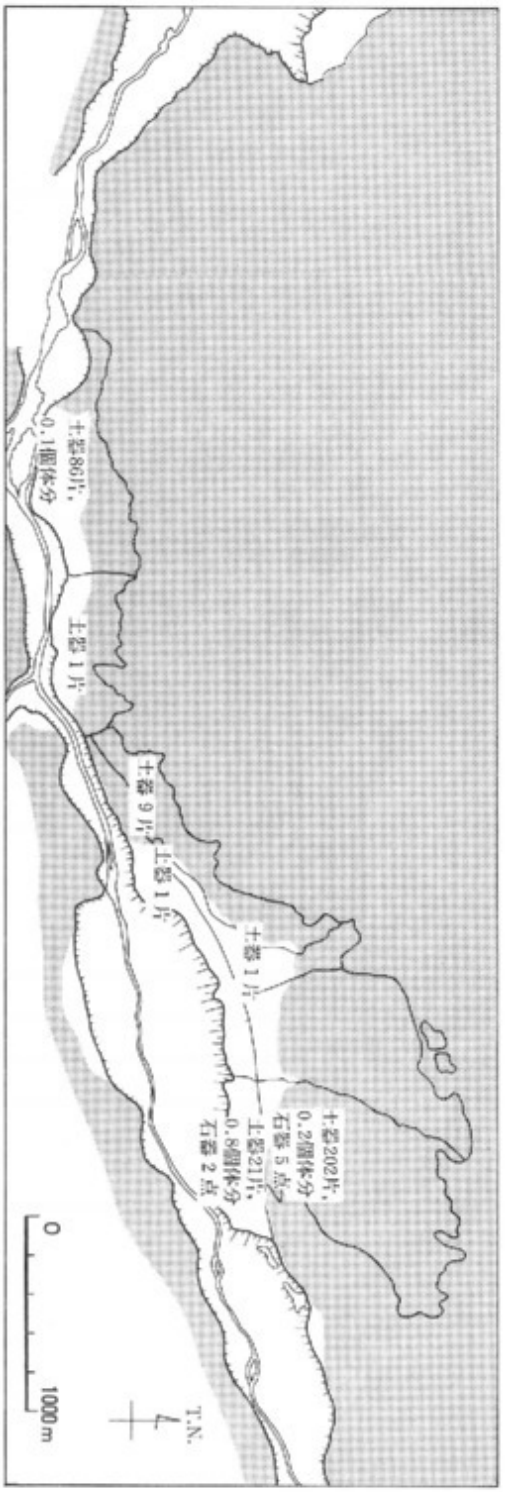
第14図　II 2 地区古代遺物の散布状態



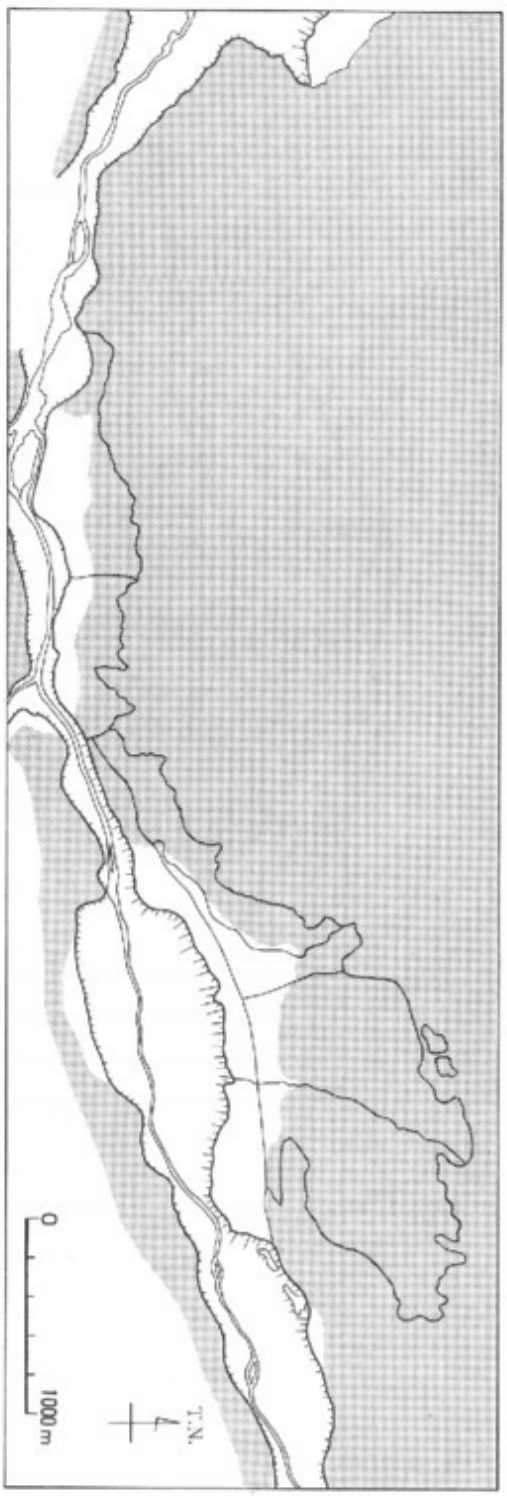
第15図　II 2 地区中世遺物の散布状態



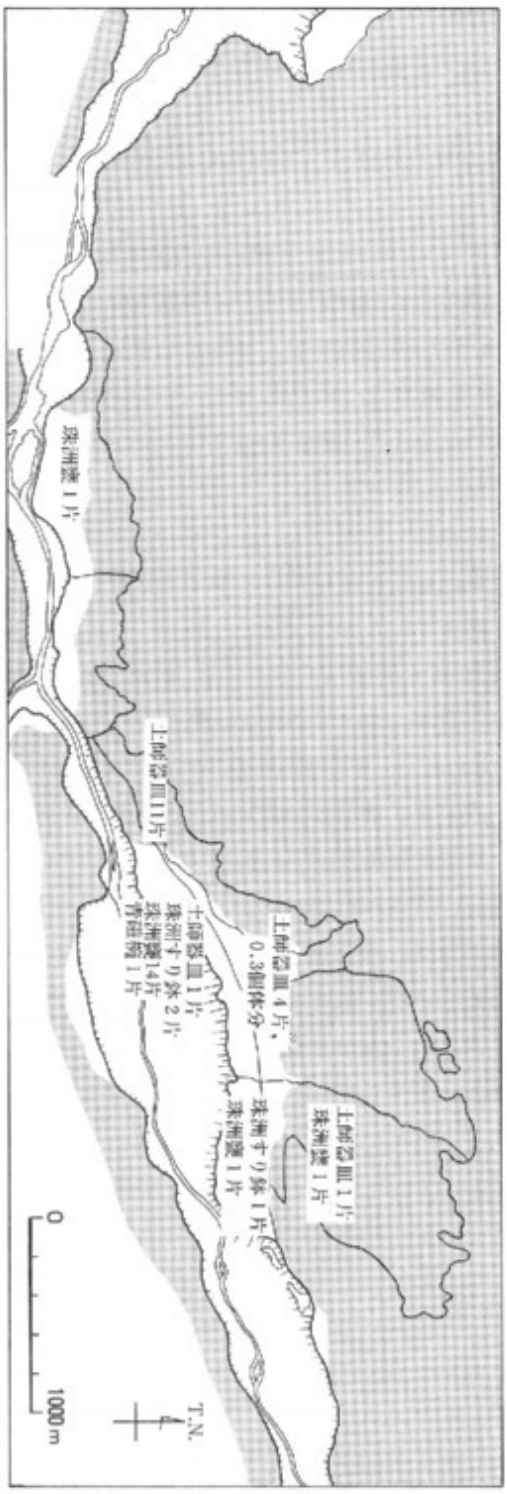
第16図　II 2 地区近世遺物の散布状態



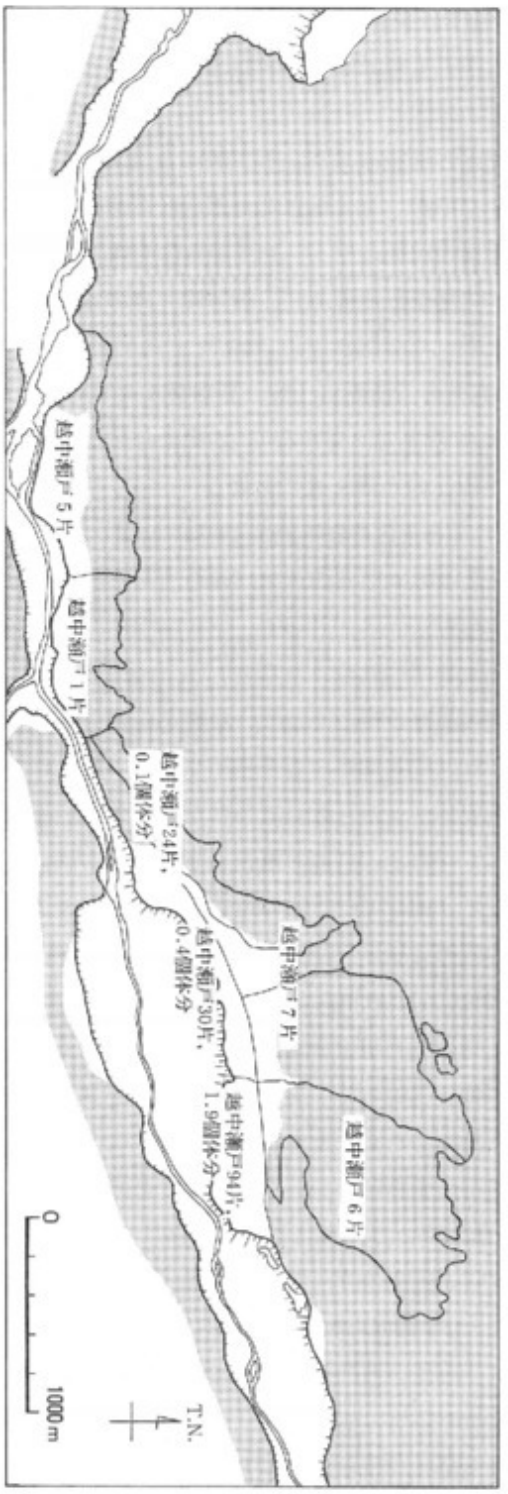
第17図　II 3 地区縄文時代遺物の散布状態



第18図　II 3 地区古代遺物の散布状態



第19図　II３地区中世遺物の散布状態



第20図　II３地区近世遺物の散布状態

古代の遺物は須恵器8片・口縁部0（杯A1片、杯B1片、壺2片、甕3片、不明1片）を採集した（第10図）。年代はI地区の上末窯（8世紀後半～10世紀初め）に併行するものであり、流入品とも考えうるが、採集地点が現代の集落が立地する微高地に多いことから、集落が営まれたと推定したい。

中世の遺物は4片・口縁部0（土師器皿2片、越前すり鉢2片）を採集した（第11図）。量は少ないが、II1地区北半部の微高地付近に散布する。

近世の遺物は54片・0.8個体分を採集した（第12図）。これらはII1地区の各地に散布する。すべて越中瀬戸であり、椀10片・0.3個体分（灰釉椀3片、鉄釉椀6片・0.2個体分、長石釉椀1片・0.1個体分）、皿3片・0.1個体分（鉄釉皿2片・0.1個体分、無釉皿1片）、鉢2片・0.5個体分（灰釉鉢1片、鉄釉鉢1片）、壺24片・0.4個体分（鉄釉壺5片・0.1個体分、無釉壺19片・0.3個体分）、鉄釉すり鉢2片、鉄釉おろし板1片、灰釉器種不明1片、鉄釉器種不明10片、不明1片である。

(2) II2地区の散布状態（第13～16図）

II2地区は標高約200～300mを測る河岸段丘である。ここでは1433片・31.1個体分の遺物を採集した。

縄文時代の遺物は土器1371片・0.9個体分、石器30点・30個体である（第13図）。土器は縄文時代中期を中心として、早期から後・晩期に及び、石器もすべてこれらに伴うものである。とりわけ現在畑地として利用されているという理由もあるが、II2地区南半部の天林南遺跡からの採集品が多かった。石器は玦状耳飾1、石鏃4、石匙1、凹石5、打製石斧8、磨製石斧9、磨石1であり、打製・磨製石斧の比率が高い。また発掘資料においては、II2地区北半部の吉峰遺跡では旧石器が、天林南遺跡では打欠き石錘、石冠、石刀が出土している。

古代の遺物は土師器6片（杯6片）、須恵器6片（杯1片、壺2片、器種不明3片）を採集した（第14図）。これらは細片が多いため年代の比定が難しいが、古代後期（平安期）のものである。採集地点はII2地区北半部のみであるが、南半部にも及ぶことが判明している。

中世の遺物としては土師器を12片採集した（第15図）。すべて皿であり、II2地区北半部から11片、南半部から1片を得た。

近世の遺物は8片・0.2個体分を採集した（第16図）。すべて越中瀬戸であり、鉄釉椀4片・0.2個体分、鉄釉鉢1片、鉄釉壺1片、鉄釉灯明立て1片、不明1片である。これらはII2地区の各地に比較的平均して散布する。

(3) II3地区の散布状態（第17～20図）

II3地区は標高約300～400m余を測る河岸段丘である。ここでは527片・10.2個体分の資料を採集した。

縄文時代の遺物は土器321片・0.3個体分、石器7点・7個体である（第17図）。これらは地区の各所に散布するが、標高の最も高い東端部に多い。土器は中期のものが多く、前期から後

期初めに及び、石器は石鏃4、打製石斧2、磨製石斧3である。

古代の遺物はII3地区では採集できなかった（第18図）。

中世の遺物は土師器皿16片・0.3個体分、珠洲すり鉢3片、珠洲甕17片、竜泉窯系青磁椀1片である（第19図）。これらはII3地区の各地に散布するが、特に雄山神社中宮の南の宿坊付近に多い。年代は中世後期のものが主流である。

近世の遺物は越中瀬戸162片・2.6個体分を採集した（第20図）。椀41片・0.1個体分（灰釉椀2片、鉄釉椀34片・0.1個体分、灰・鉄釉椀2片、不明3片）、皿105片・2.1個体分（灰釉皿2片・0.1個体分、鉄釉皿6片・0.3個体分、無釉皿96片・1.7個体分、不明1片）、鉄釉鉢1片・0.1個体分、壺17片・0.2個体分（鉄釉壺4片、無釉壺12片・0.2個体分、不明1片）、鉄釉器種不明1片、無釉器種不明1片であり、型入れ土製品1片がある。これらは段丘の各所に散布するが、宿坊付近と仲宮寺遺跡に特に多い。なお仲宮寺遺跡で多数採集した無釉皿は近世墓地に伴うものであり、その他の地点にはあまり散布しない。

(4) 遺物の散布について

各地区の遺物散布状態は以上に示したとおりであるが、気付いた点を若干記しておきたい。

縄文時代の遺物は氾濫原に少なく、河岸段丘に集中する。とりわけII2地区は遺物の採集量と遺跡の継続性において、卓越している。石器組成から生業を推定すると、植物質食料の採集を基本として狩猟・漁撈を加える多様な活動と考えうるが、当地が照葉樹林帯と落葉樹林帯の境付近にあたることが安定した生活を営めた主な理由ではなかったかという点を、今後の調査の課題としたい。

弥生～古墳時代の遺跡については全く存在しなかったとは言えないが、存在しても例外的なものであり、古代以後に再開発が進んだと推定できる。

中世の遺物は土師器の皿と、珠洲・越前の甕・すり鉢のみであった。このことは中世には農村においても鉄製鍋・釜と漆器椀が普及していたことを示している。従って出土量を単純に以前の時期と比較することはできない。なお施釉陶磁器は宿坊付近で採集した中国製磁器1片のみであり、農村においてはこれをあまり用いていなかったと推定したい。

近世には一転して施釉陶磁器の各種の器種を用いるようになる。今後の調査においてその普及過程を明らかにしたい。また生産地が近いこともあってそのほとんどは越中瀬戸であるが、その他の生産地の製品の有無も今後の検討課題である。（宇野隆夫）

第3章　おわりに

1985・1986年度の分布調査によって47遺跡を確認し、6143片・143.4個体分の遺物を採集することができた。これらの資料は遺跡保護に役立つばかりでなく、地域を網羅する点において、発掘成果と補いあう歴史資料として活用できるものである。

調査した地区の多くは河岸段丘であり（Ⅰ・Ⅱ2・Ⅱ3地区）、氾濫原を含む（Ⅱ1地区）。この調査地区の中で最も継続的に利用されているのはⅠ地区北半部である。この上段段丘北半部は立山山麓の複合扇状地内に突き出る低い段丘（標高約50m～150m）であり、旧石器時代から現代に至るまで量に増減があるものの各期の遺物が散布し、集落・墓地・寺社・軍事的拠点など色々に用いている。

これに対して標高約150m～200mの上段段丘南半部は、若干の縄文遺跡が立地して後、弥生・古墳時代の遺物はほとんど散布しない。この地が再び利用されるのは古代前期に須恵器窯（8世紀後半～10世紀初め）が築かれて後であり、近世には越中瀬戸の生産地となる。

標高約200m～300mを測る吉峰段丘・天林段丘（Ⅱ2地区）は、旧石器～縄文時代の遺跡が最も栄えた地であり、ここでは弥生～古代前期の資料がない。そして古代後期（平安期頃）に至って遺物が散布するようになり、中世・近世へと漸増していく。

標高が約300m～400m余と最も高い芦峅寺段丘（Ⅱ3地区）では、縄文中・後期を中心とする遺跡が営まれて後、古代までの遺物をほとんど採集できない。この地では中世（平安末以後）になってようやく若干の遺物が散布しはじめる。しかし中世後期から近世にかけて遺物の散布量は急増し、越中瀬戸の採集量は生産地以外では最も多かった。このことは当地に雄山神社中宮が所在して立山への参詣者の宿坊として繁栄したことを反映し、立山信仰の発展過程を考古資料から示すものである。

以上に対してⅡ1地区の大部分は標高約50m～170mを測る氾濫原であり、旧石器時代～古墳時代の遺物をほとんど採集できない。古代前期に至って現代の集落が所在する微高地に遺物が少量散布するようになり、中世・近世へと漸増していく。

以上、私達が2年間歩いた地域は、県下でも有数の縄文遺跡集中地帯として知られている所である。また当地は付近に所在する北陸屈指のスキー場が賑わうことに示されるように雪の深い地域であるが、現在も平地や緩傾斜地は、ほとんどくまなく集落・水田・畑などに利用されている。しかしその間の過程が一様でなかったことを分布調査によって知ることができた。

河岸段丘は扇状地やデルタと比較すると、狭少であり灌漑も難しい。しかし前面に河川、背後に高山をひかえ、水害に対しても安全であるこの場は、狩猟採集民にとっては絶好の居住地となったのであろう。とりわけ扇状地内に突出するⅠ区北半部と、照葉樹林帯と落葉樹林帯の

交錯地帯であった可能性の高いII 2地区に縄文遺跡が多い。これらの遺跡は縄文中期を頂点として、後・晩期に数を減じはじめるが、弥生～古墳時代にはI地区北半部を除いてほとんど利用されなくなり、原野になったと考えうる。

この様相に変化が生じるのは古代であり、I地区南半部に須恵器窯(8世紀後半～10世紀初め)が築かれることが契機になったらしい。この頃、付近の谷の氾濫原であるII 1地区にも遺跡を営むようになる。この須恵器窯は10世紀に衰退するが、遺物の散布地は古代後期にはII 2地区へ、中世にはII 3地区へと広まり、近世に至ると各地で散布量が増加する。この中世から近世にかけての動きの中で現代の基本的な景観が形成されたのであろう。

来年度からは扇状地・デルタ地帯の分布調査を実施する予定である。この地域は堆積が著しいためどれだけの資料を採集できるかは不明であるが、若干の見通しを示しておきたい。現在までの調査の成果から予測するならば、その開発史はI・II地区と対照的である可能性が高い。すなわち一方で遺跡が増加する時期に他方が減少するという関係があったであろう。この様相は古代に転機をむかえ、中世以後にはすべての地域において開発が進行したと想像する。その転機の在り方や東西日本における地域差の把握には日本史の根幹にかかわる問題を解明する鍵がひそんでいる。

(宇野隆夫・森秀典)

参 考 文 献

1 金沢市教育委員会『金沢市古府遺跡第4・5次調査報告』1974年。

2 神村透「押型文土器―長野県の遺跡から―」『月刊考古学ジャーナル』No.267、1986年9月号。

3 小島俊彰・国沢進・西井龍儀「中新川郡立山町天林南遺跡B地点(1)」『オジャラ』5、1970年。

4 小島俊彰「北陸の縄文時代中期の編年―戦後の研究史と現状―」『大境』第5号、1974年。

5 桜井仁吉『新崎式土器のパターン認識』1976年。

6 桜井仁吉「新崎式土器のパターン認識II」『大境』第7号、1981年。

7 大門町教育委員会『串田新遺跡』II、大門町埋蔵文化財調査報告第2集、1981年。

8 大門町教育委員会『串田新遺跡』IV、大門町埋蔵文化財調査報告第4集、1982年。

9 大門町教育委員会『小泉遺跡』大門町埋蔵文化財報告第5集、1982年。

10 高岡徹「芦峅寺をめぐる城砦群とその性格―新発見の芦峅寺城・原砦跡を中心に―」『かんとりい』第9号、1986年。

11 高堀勝喜「縄文文化の発展と地域性―北陸―」『日本の考古学』II縄文時代、1965年。

12 立山町教育委員会『富山県立山町金剛新遺跡緊急発掘調査概報』1975年。

13 立山町教育委員会『立山町史』上巻、1977年。

14 立山町教育委員会『立山町史』下巻・別巻、1984年。

15 立山町教育委員会『白岩薮ノ上遺跡・吉峰遺跡』富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要、1981年。

16 立山町教育委員会『富山県立山町総合公園内野沢狐幅遺跡緊急発掘調査概要』I、1983年。

17 立山町教育委員会『富山県立山町総合公園内野沢狐幅遺跡発掘調査概報』II、1985年。

18 立山町教育委員会『立山町文化財分布調査報告』I、立山町文化財調査報告書第1冊、1986年。

19 富山県『富山県史』考古編、1972年。

20 富山県教育委員会『極楽寺遺跡発掘調査報告書』1965年。

21 富山県教育委員会『立山文化遺跡調査報告書』1970年。

22 富山県教育委員会『富山県埋蔵文化財調査報告書』II、1972年。

23 富山県教育委員会『富山県立山町吉峰遺跡第3次発掘調査概報』1974年。

24 富山県教育委員会『富山県立山町吉峰遺跡第4次緊急発掘調査概報』1975年。

25 富山県教育委員会『富山県大門町串田新遺跡発掘調査概報』1973年。

26 富山県教育委員会『富山県遺跡地図』1972年。

27 富山県教育委員会『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』1976年。

28 富山県教育委員会『富山県宇奈月町浦上寺蔵遺跡緊急発掘調査概要』1977年。

29 富山県教育委員会『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』1977年。

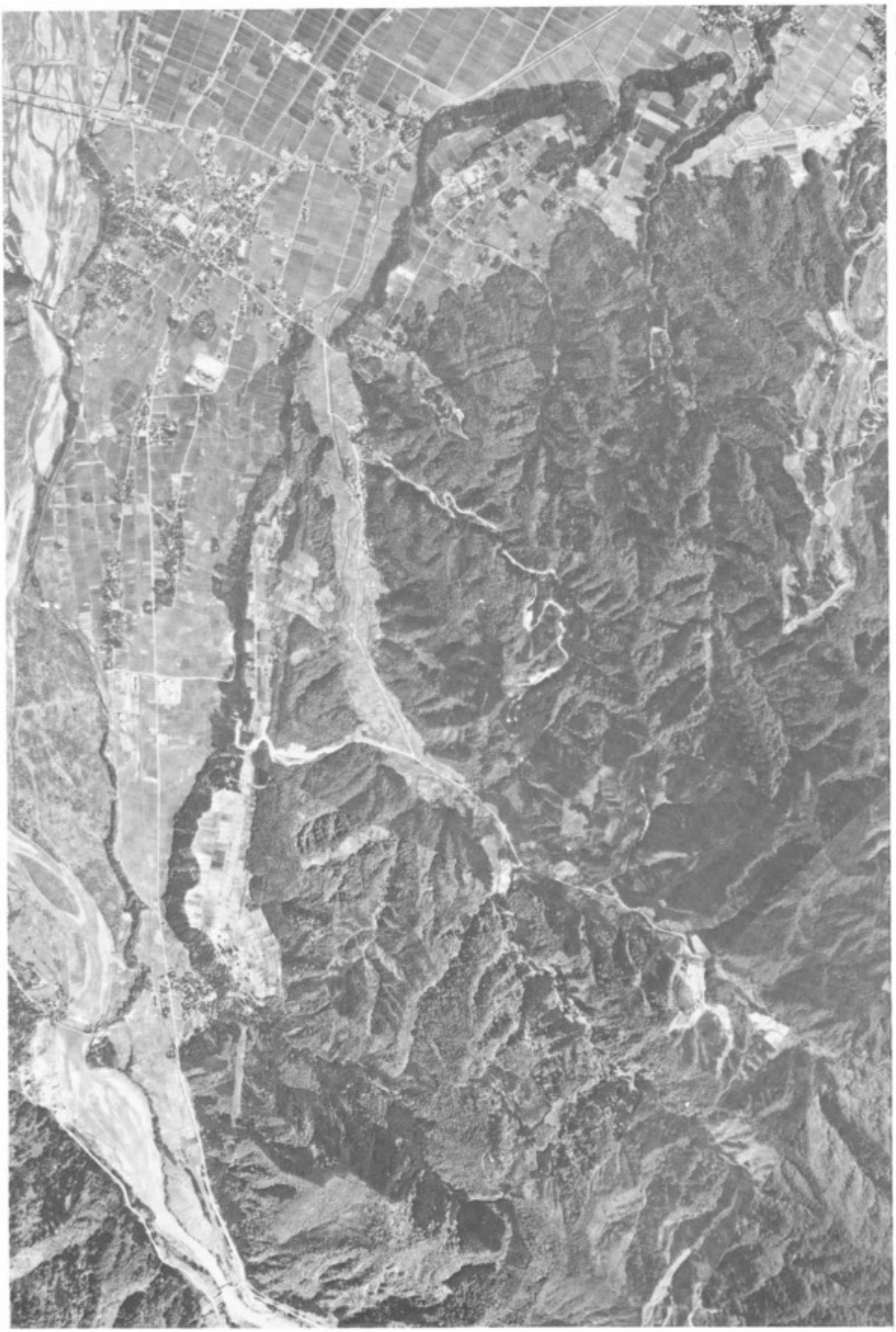
30 富山県教育委員会『富山県歴史の道調査報告書―立山道―』1981年。

31　富山県教育委員会『昭和59年度富山県埋蔵文化財調査一覧』1985年。
32　富山県教育委員会『昭和60年度富山県埋蔵文化財調査一覧』1986年。
33　富山県教育委員会・魚津市教育委員会『天神山遺跡調査報告書』1959年。
34　富山県教育委員会・魚津市教育委員会『桜峠遺跡調査報告書』（上）1961年。
35　富山県教育委員会・魚津市教育委員会『桜峠遺跡調査報告書』（下）1962年。
36　富山県立小杉高等学校地歴班『富山県射水郡櫛田村字串田新 串田新遺跡調査報告書』 1952年。
37　橋本正「回転押型文土器の問題―富山県の場合―」『大境』第4号、1968年。
38　橋本正「回転押型文土器の基礎的研究」『大境』第5号、1974年。
39　藤田富士夫『富山』日本の古代遺跡13、1983年。
40　南久和「北陸の縄文時代中期の編年について」『北陸の縄文時代中期の編年他9編』1985年。
41　森秀典「北陸の縄文時代中期後葉"串田新式"に関する編年試案」『大境』第8号、1984年。
42　安田良栄『富山県立山町岩峅野遺跡の土器文様』1963年。
43　安田良栄『富山県立山町天林南地区の先史遺跡について』1963年。
44　安田良栄「吉峰の瓦器出土遺跡について」『立山の文化』第4号、1965年。
45　八尾町教育委員会『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告』1985年。
46　八尾町教育委員会『富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯跡緊急発掘調査概要』1985年。
47　吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3日本中世、1977年。
48　小島俊彰「天林北遺跡採集の異形石器」富山考古学会『連絡紙』12、1967年。
49　小島俊彰「天林南遺跡採集の小石棒」『大境』第4号、1968年。

図版一　II 1地区航空写真

(1978年撮影，縮尺1/25,000，第3図参照)

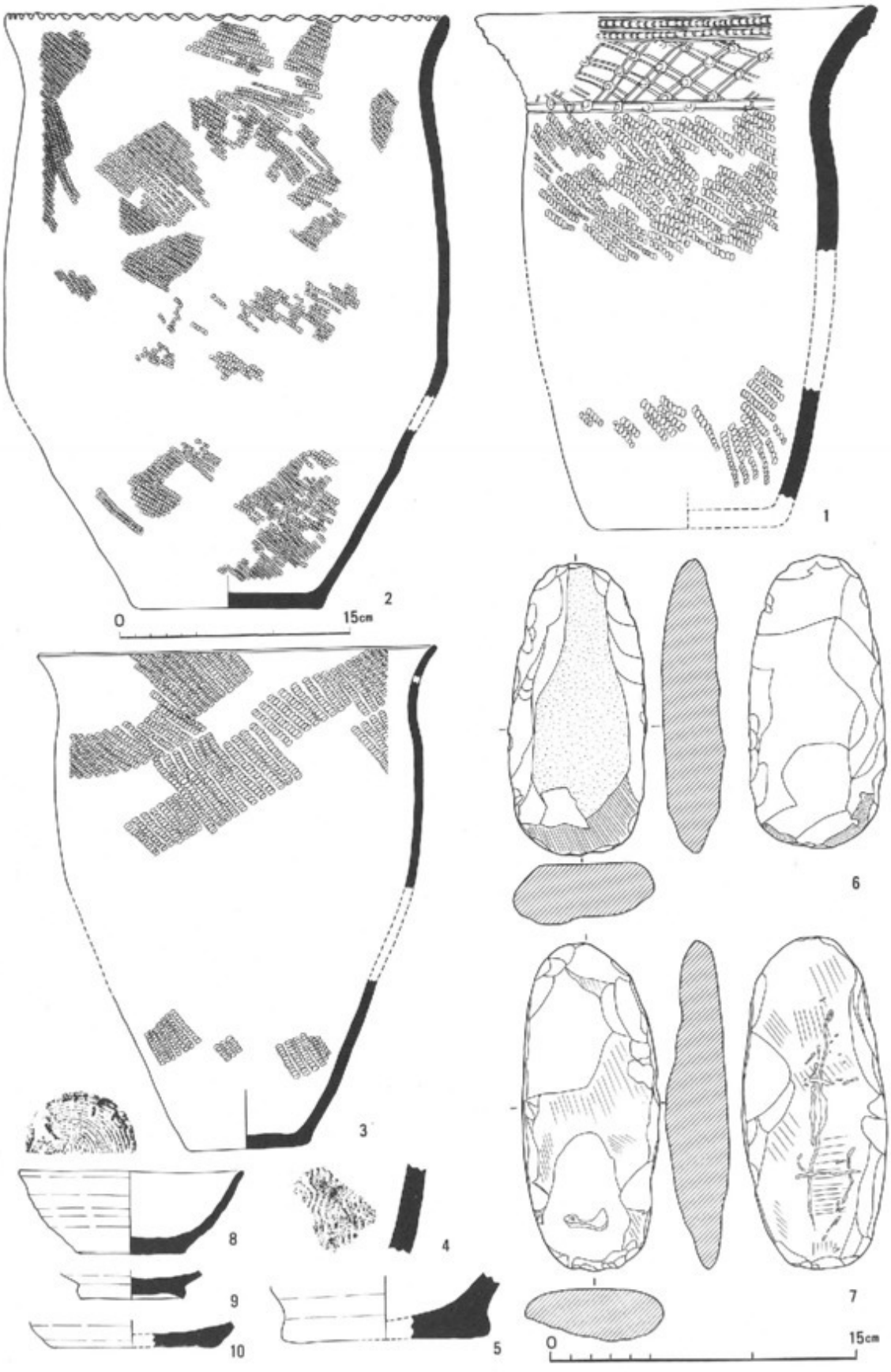
図版二　II2地区航空写真



(1978年撮影，縮尺1/25,000，第5図参照)

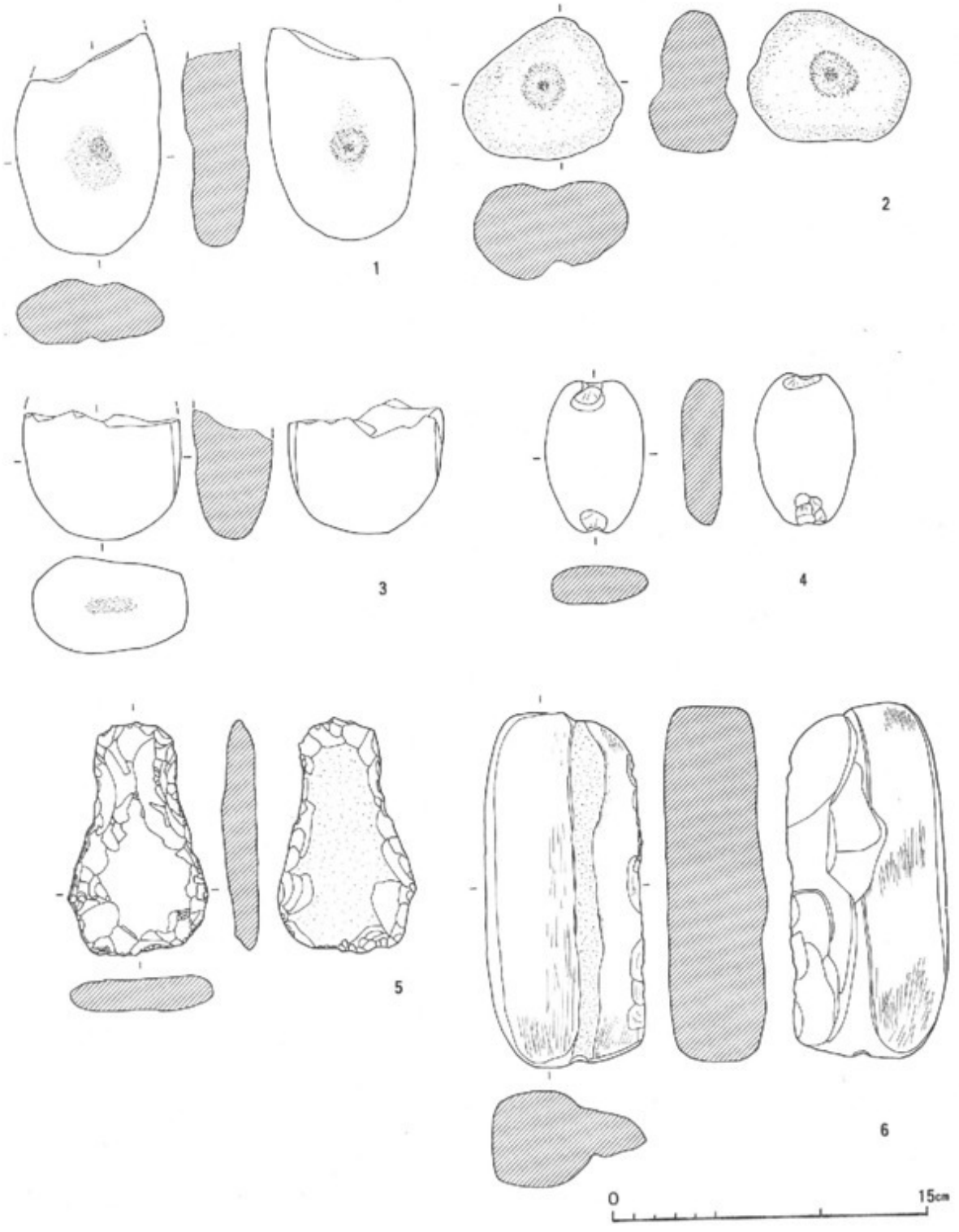
図版三　II3地区航空写真

(1978年撮影，縮尺1/25,000，第7図参照)

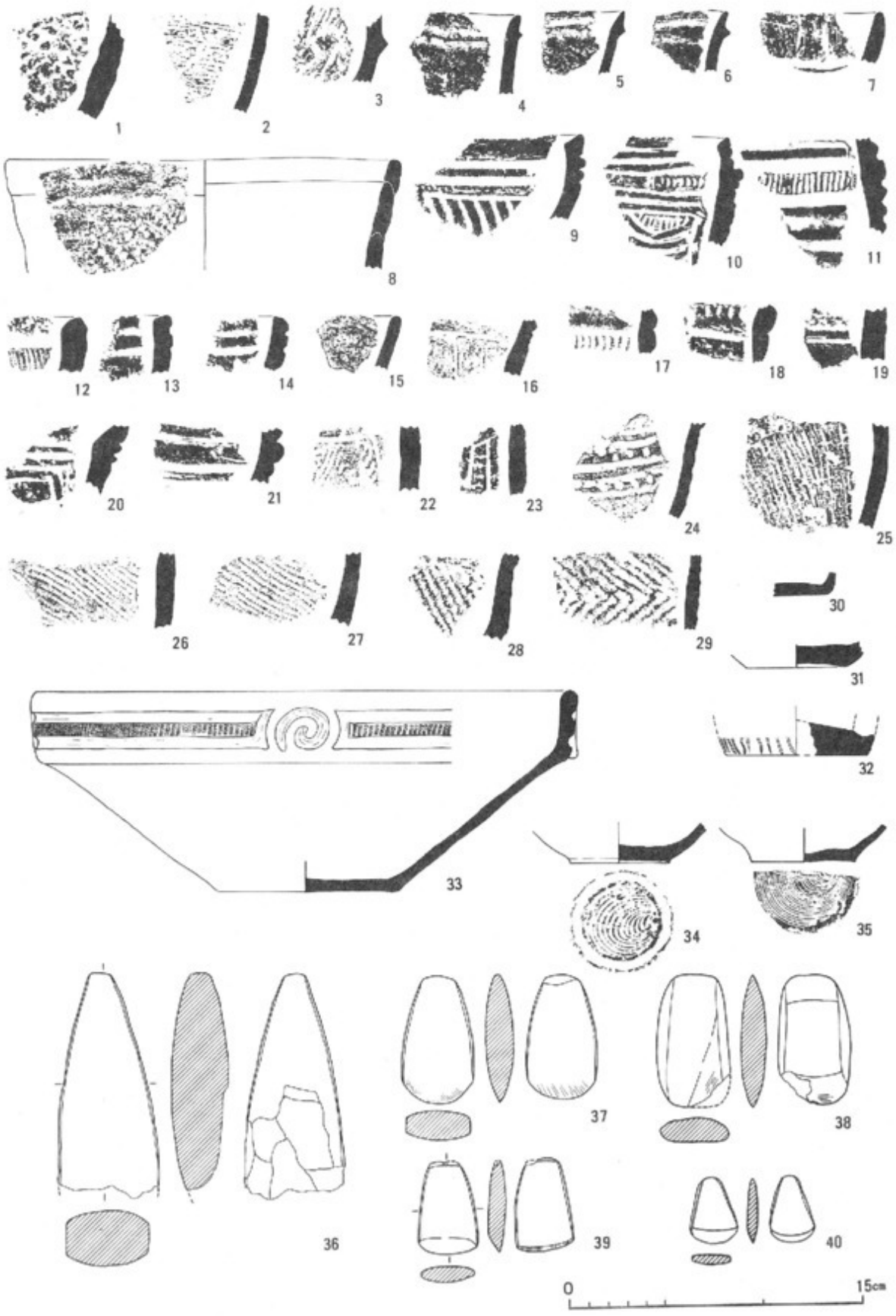


縄文土器・石器，古代土師器・須恵器
(1～4・7・8：吉峰遺跡，5・6・9・10：吉峰祭祀遺跡，1・3～10：縮尺1/3，2：縮尺1/4，図版12参照)

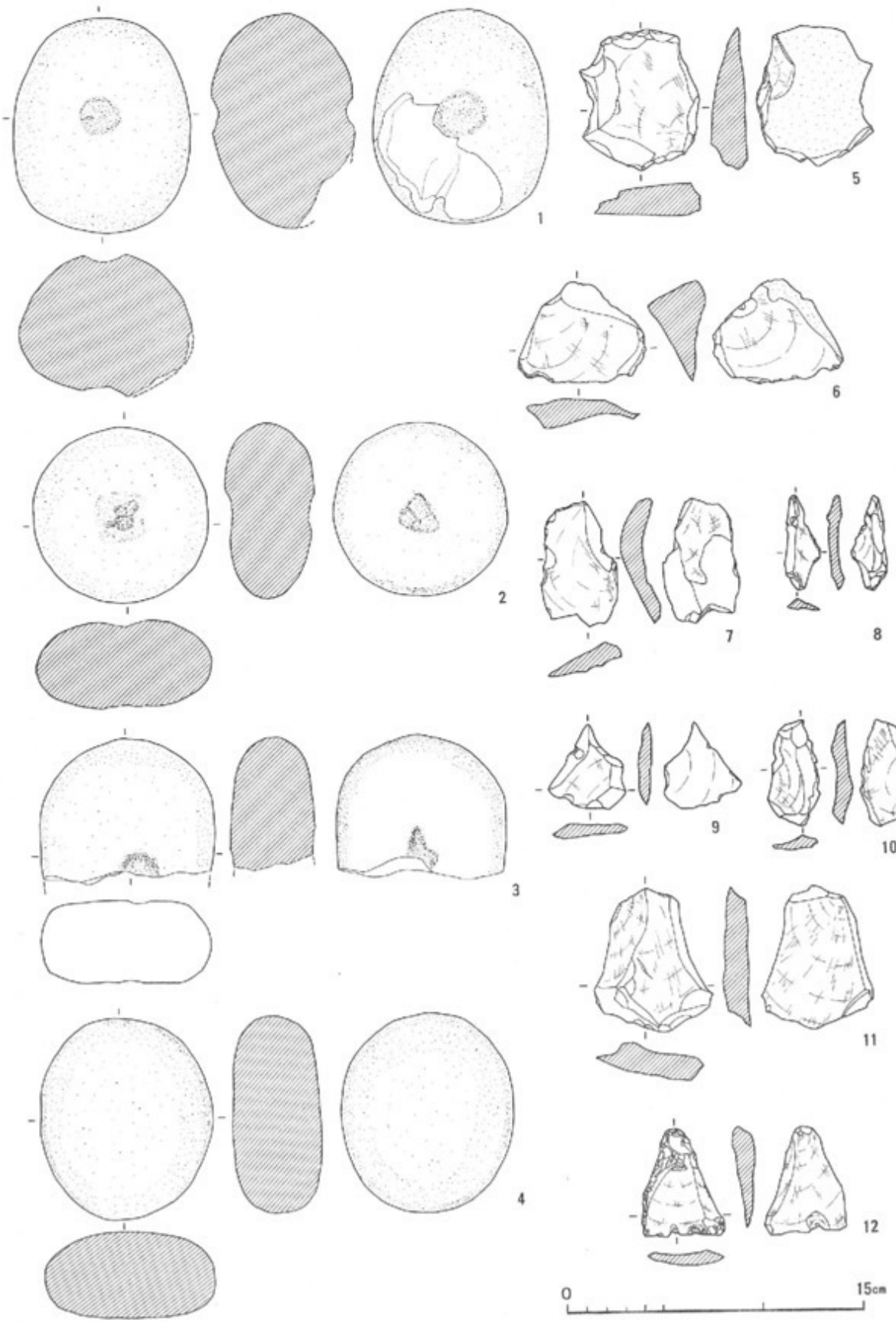
縄文土器・石器　（1～5：末谷口遺跡，6～27：天林北遺跡，縮尺1/3，図版13参照）



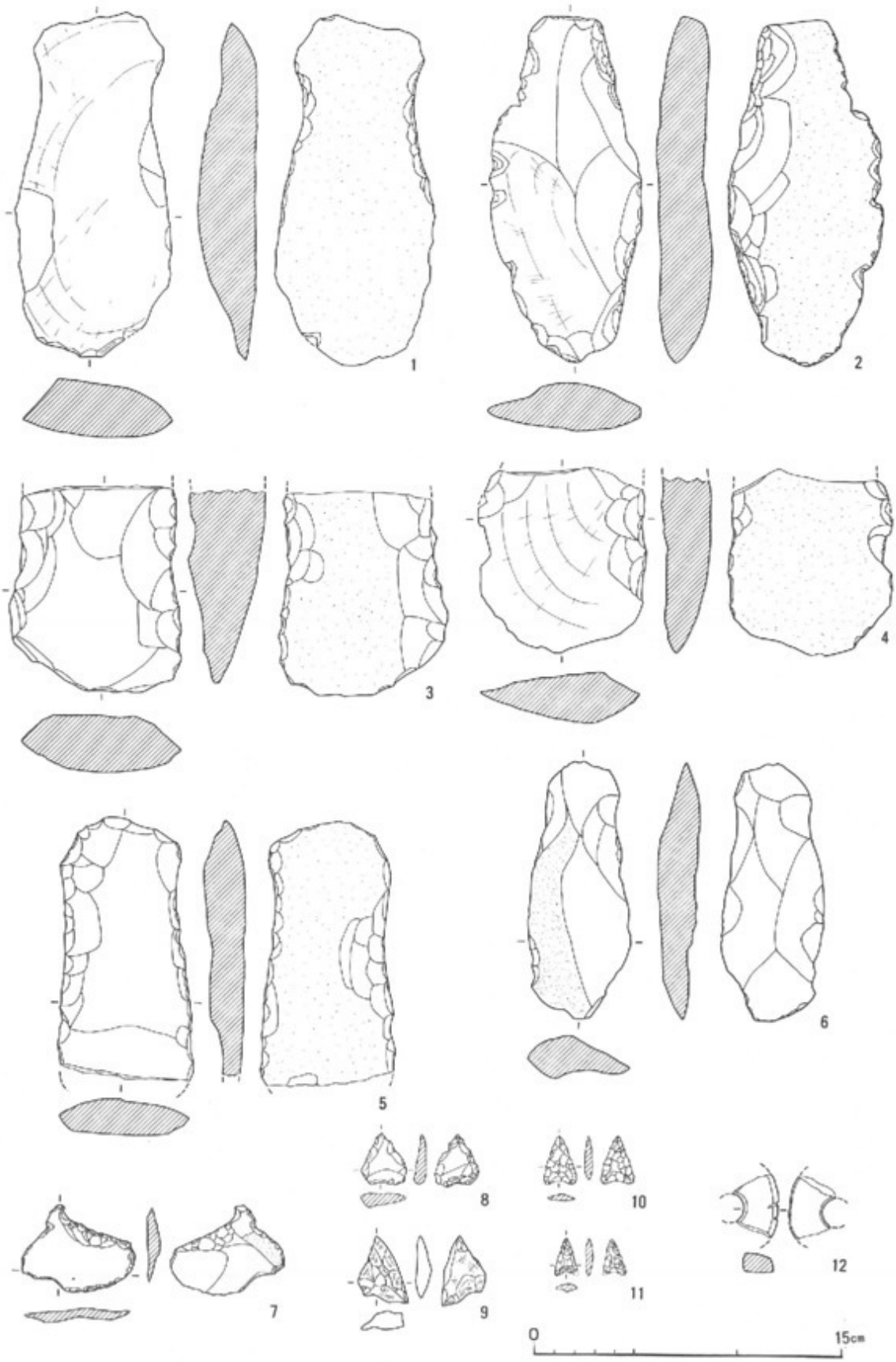
縄文石器　（1～6：天林北遺跡，縮尺1/3，図版14参照）



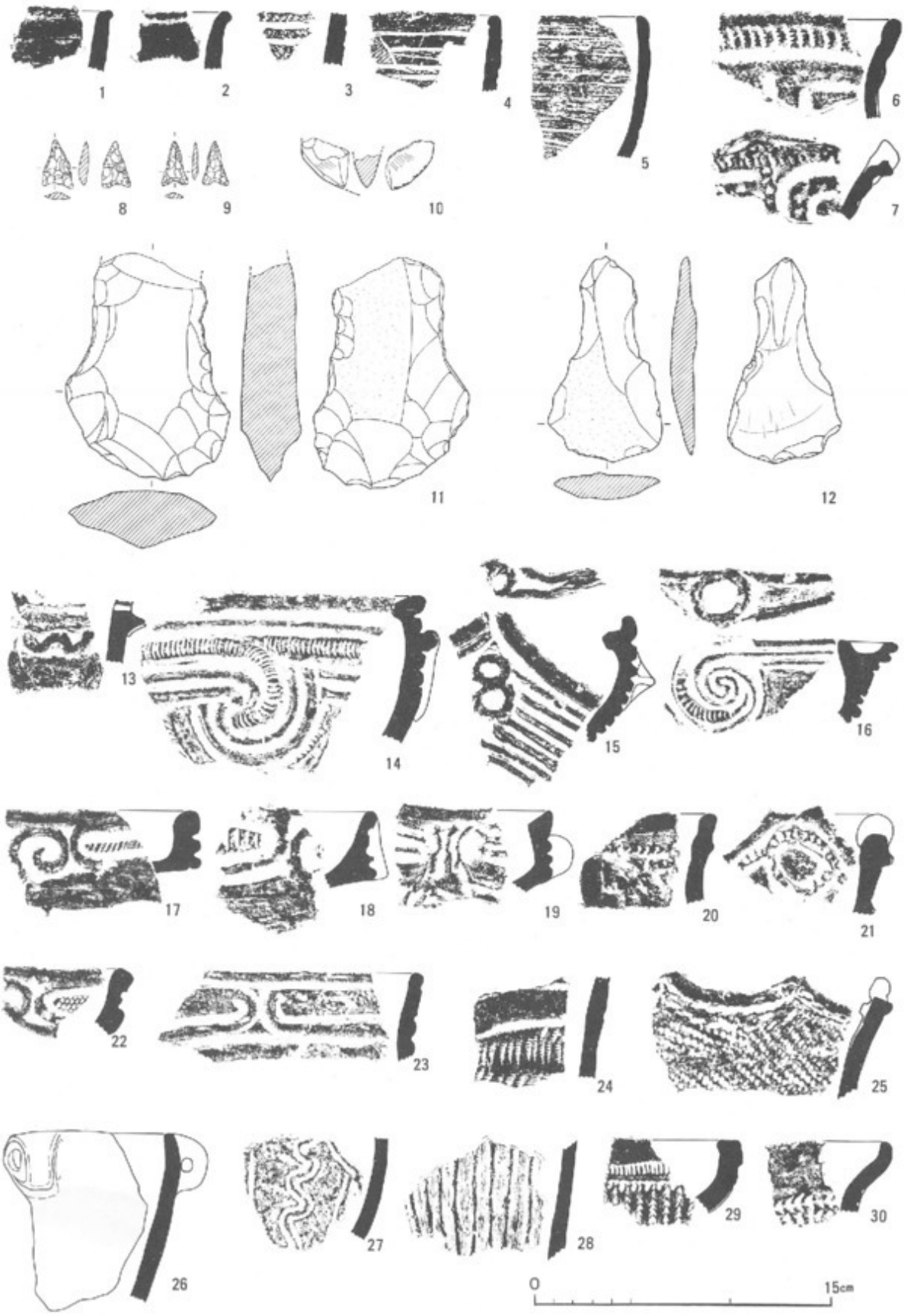
縄文土器・石器，古代須恵器（1～40:天林南遺跡，縮尺1/3，図版15参照）



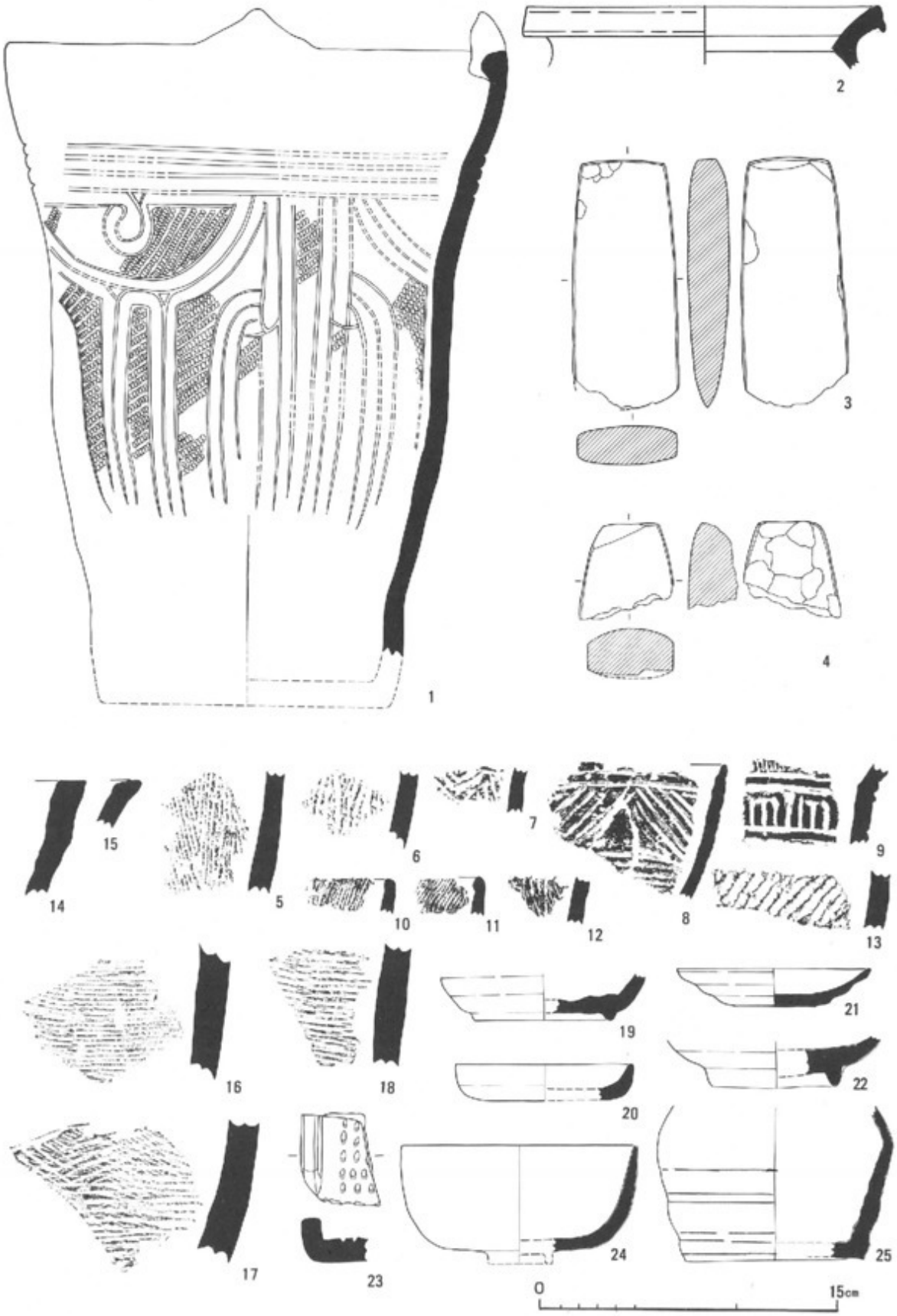
縄文石器・二次調整をもつ剝片（1～12:天林南遺跡，縮尺1/3，図版16参照）



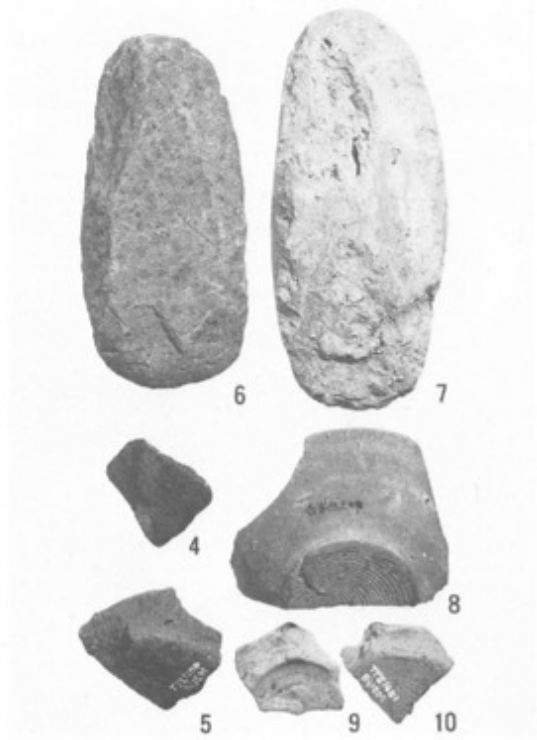
縄文石器　(1～12:天林南遺跡，縮尺1/3，図版17参照)



縄文土器・石器　（1～12:不動平遺跡，13～30:古屋敷遺跡，縮尺1/3，図版18参照）

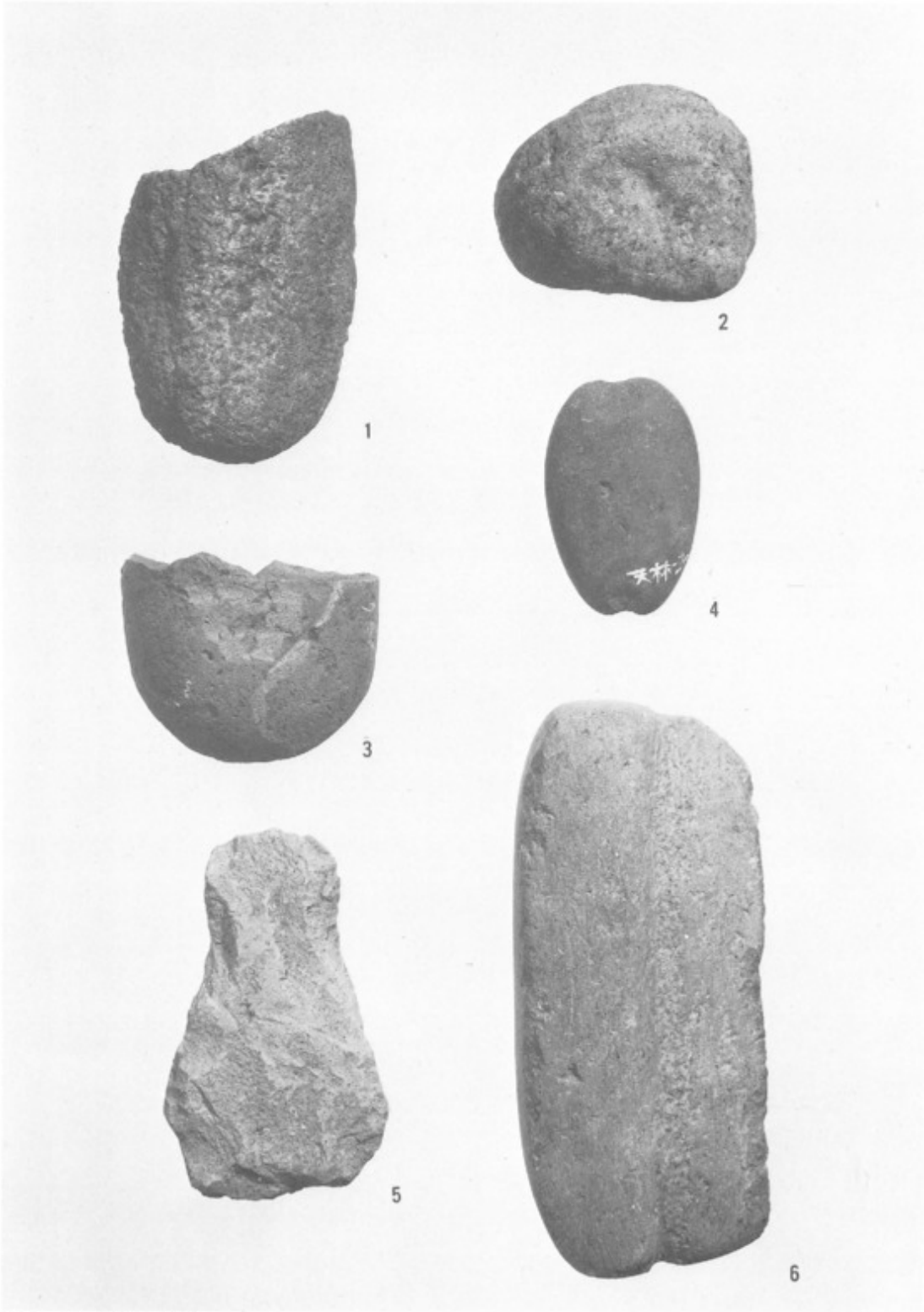


縄文土器・石器，弥生土器，古代須恵器，中世土師器・須恵器・陶磁器，近世越中瀬戸
（1～4：古屋敷遺跡，5：4イ地区，6・7：19ロ地区，8～13：8ロ地区，14：4ロ地区，15：4イ地区，16：仲宮寺遺跡，17：4ロ地区，18：4イ地区，19：29イ地区，20：5イ地区，21：仲宮寺遺跡，22：4イ地区，23：19ロ地区，24：19イ地区，25：六郎谷遺跡，縮尺1/3，図版19参照）

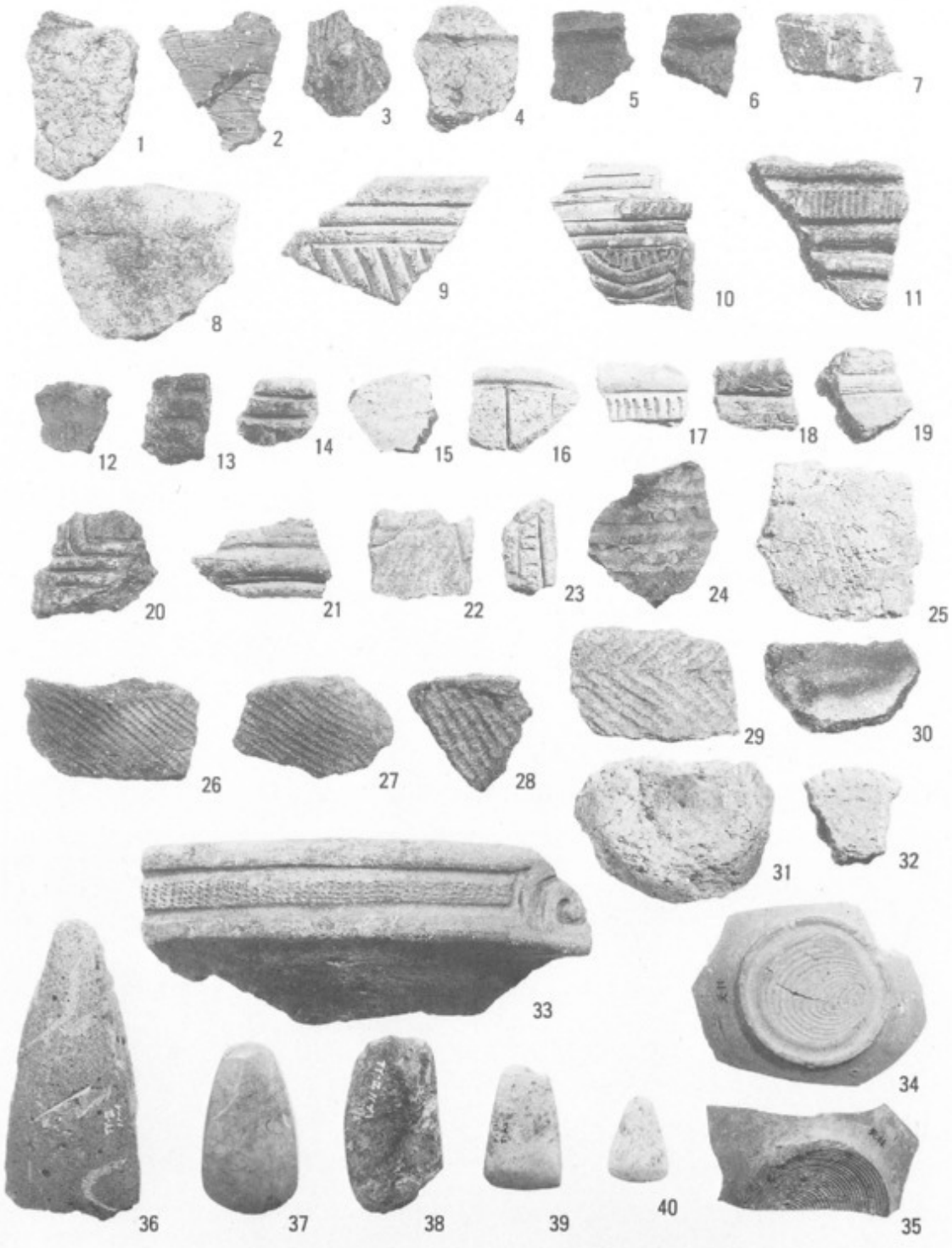


縄文土器・石器，古代土師器・須恵器（図版 4 参照）

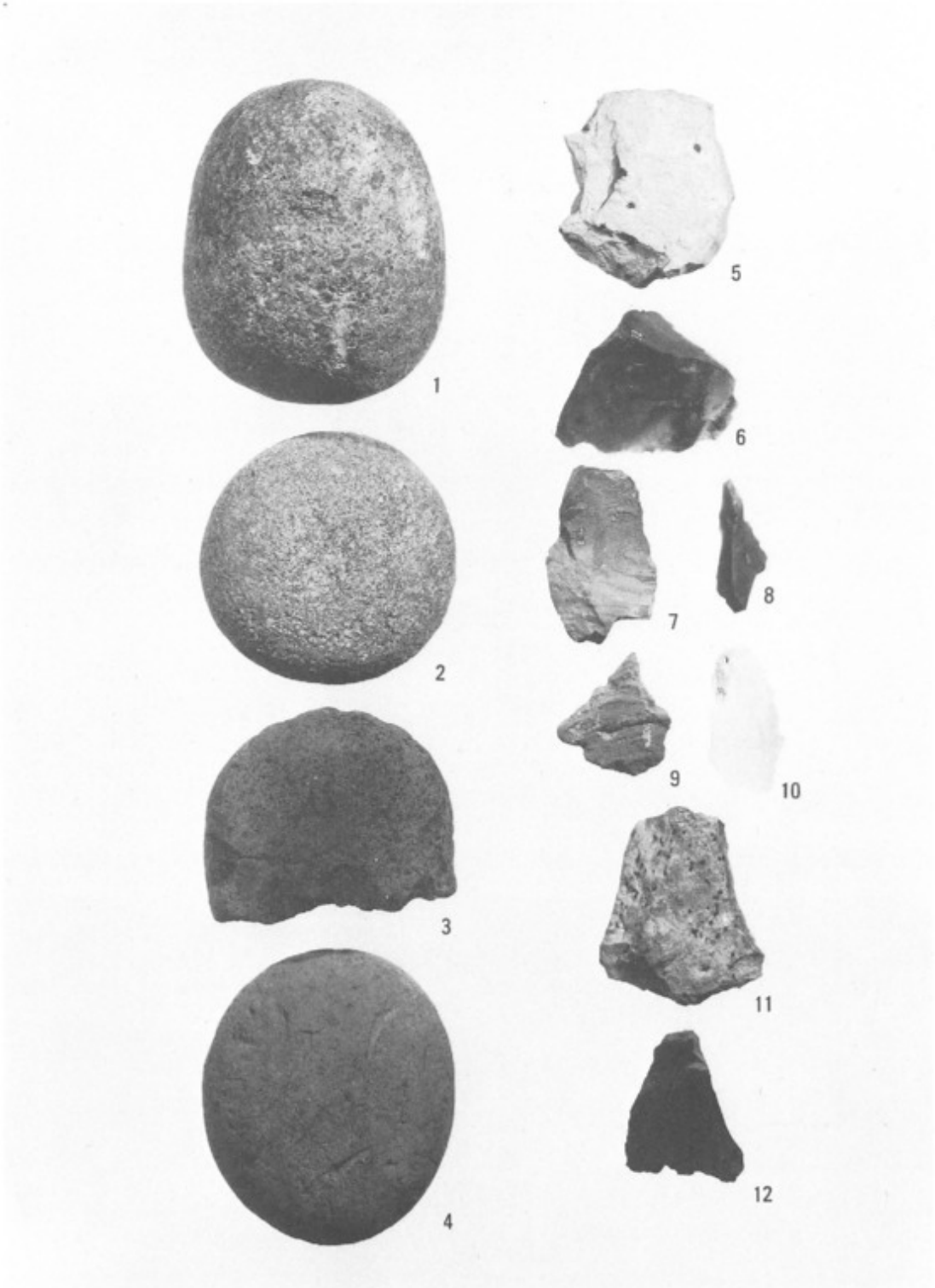
縄文土器・石器（図版５参照）



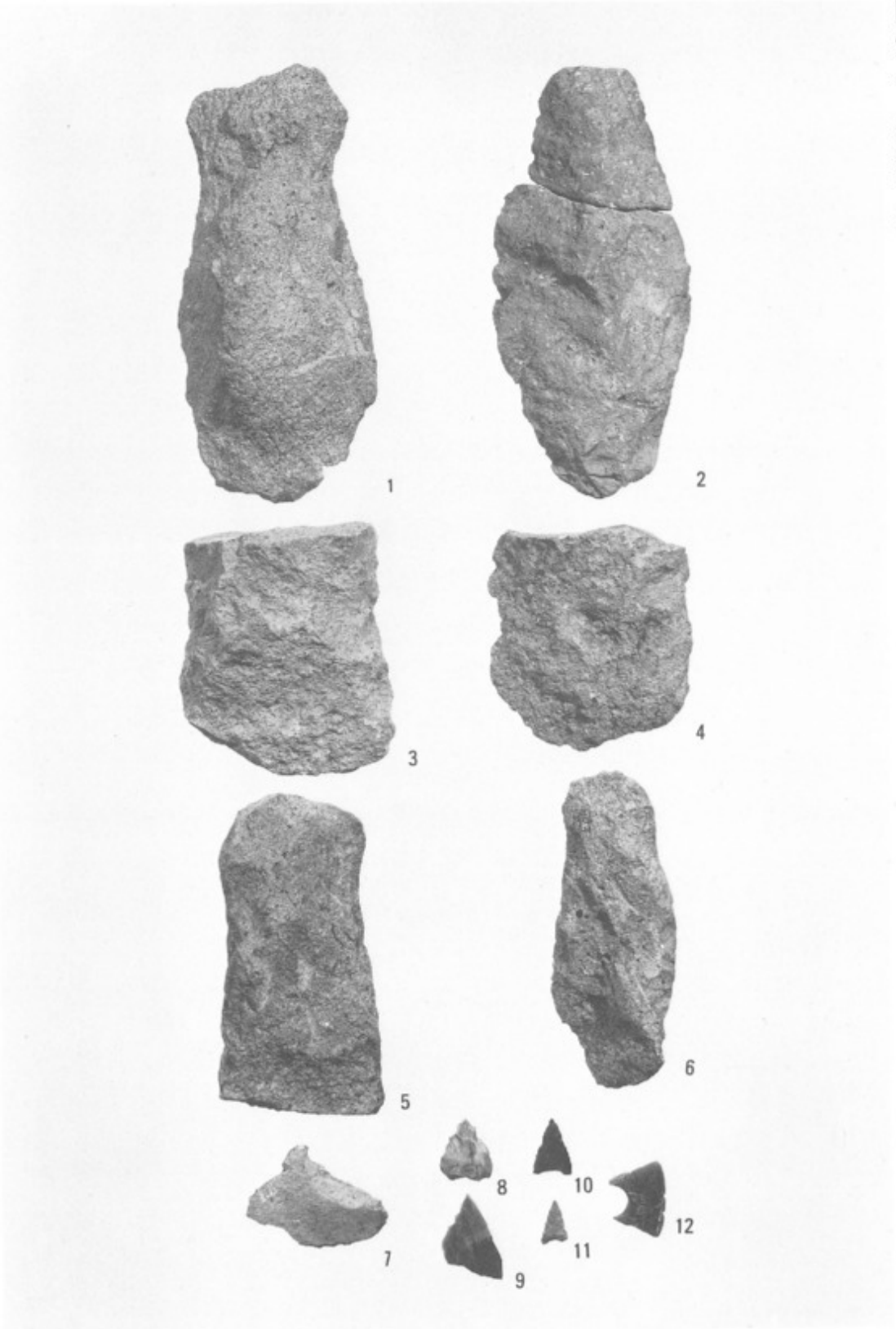
縄文石器（図版 6 参照）



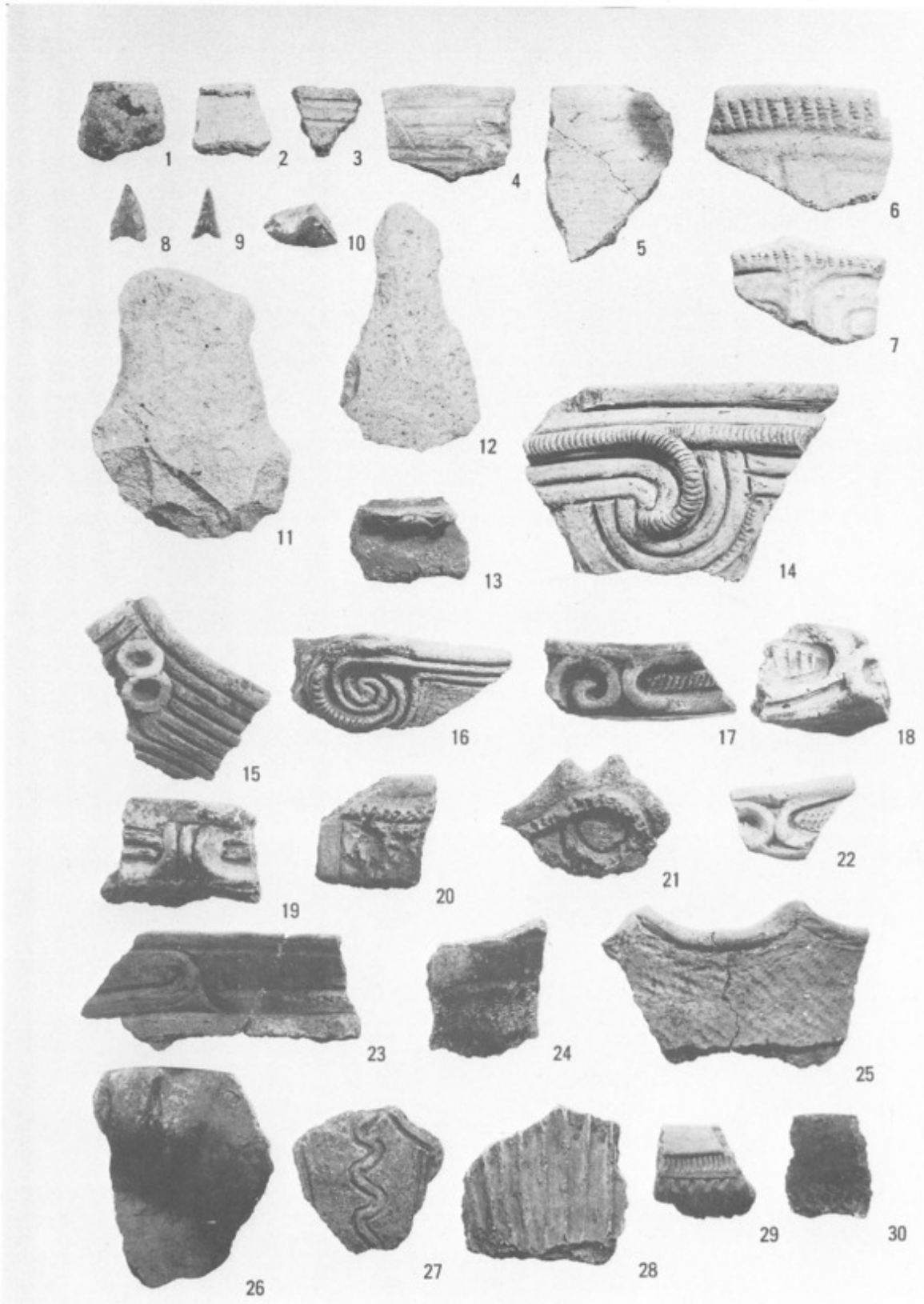
縄文土器・石器，古代須恵器（図版７参照）



縄文石器・二次調整をもつ剝片（図版８参照）



縄文石器（図版 9 参照）



縄文土器・石器（図版10参照）

縄文土器・石器，弥生土器，中世土師器・須恵器・中国製磁器，近世越中瀬戸（図版11参照）

図版二〇　Ⅱ－1地区の遺跡と遺物採集地点

31　六部谷遺跡（縄文時代）
（◎：縄文時代遺物採集地点、△：古代遺物採集地点、□：中世遺物採集地点、●：近世遺物採集地点、破線で囲った矢梨地は範囲を推定しにくい遺跡）

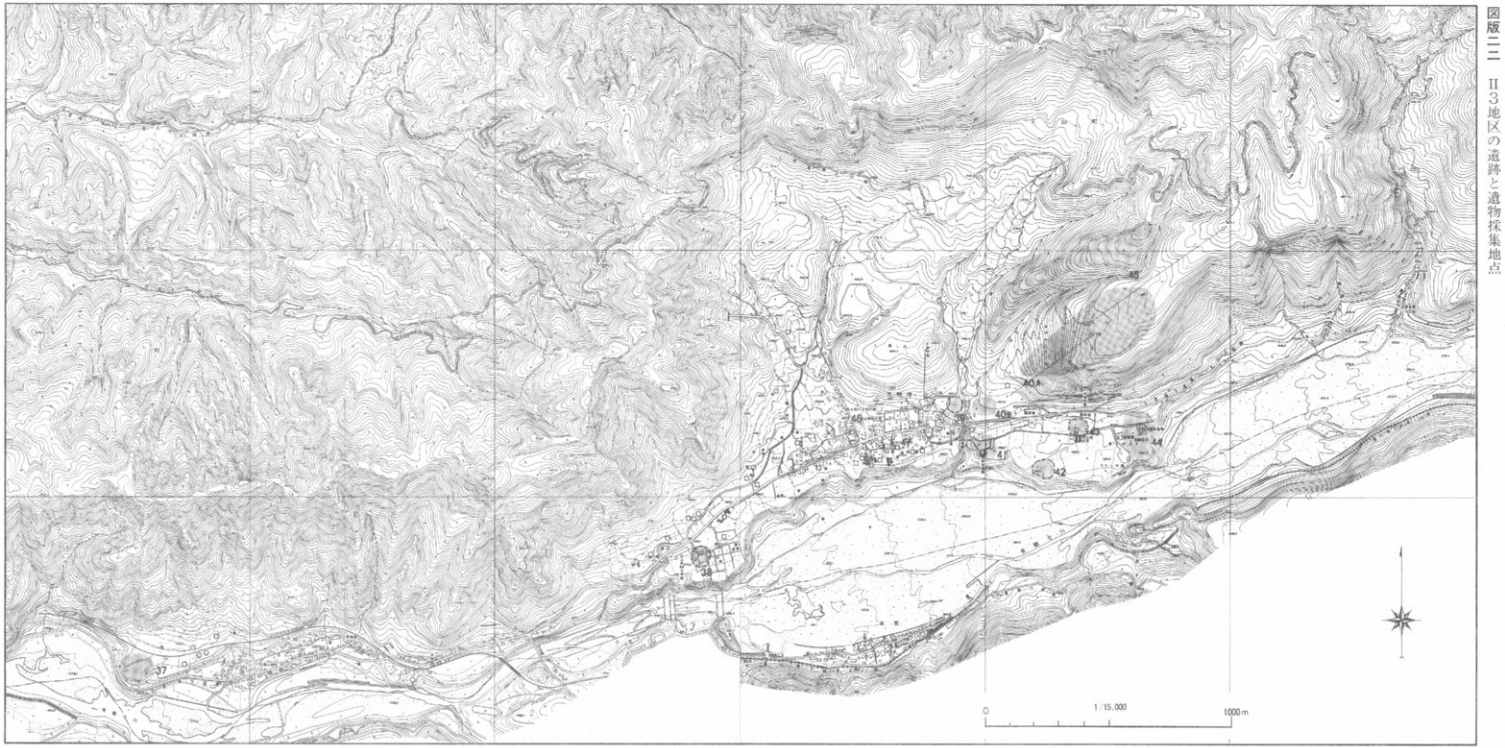
32 末谷口遺跡(縄文時代)
33 吉峰遺跡(旧石器～縄文時代，古代～近世)
34A 吉峰祭祀遺跡A地点(古代)
34B 吉峰祭祀遺跡B地点(古代)
35A 天林北遺跡A地点（縄文前期～晩期，古代～近世）
35B 天林北遺跡B地点（縄文前期～晩期，古代～近世）
35C 天林北遺跡C地点(縄文前期～晩期，古代～近世)
36 天林南遺跡(縄文早期～晩期，中・近世)

(○：縄文時代遺物採集地点，△：古代遺物採集地点，□：中世遺物採集地点，●：近世遺物採集地点，破線は消滅した遺跡)

図版二一　II 2地区の遺跡と遺物採集地点

37 千垣奥葉遺跡(縄文時代)
38 門の本割遺跡(縄文時代，中・近世)
39 野口遺跡(縄文前・中期)
40A 不動平遺跡A地点(縄文中・後期)
40B 不動平遺跡B地点(縄文中・後期)
41 仲宮寺遺跡(古代～近代)
42 古屋敷Ⅲ遺跡(縄文時代)
43 古屋敷Ⅱ遺跡(縄文時代)
44 古屋敷Ⅰ遺跡(縄文中・後期)
45 声峠寺城跡(中世)
46 雄山神社中宮(古代～近代)
47 善道坊(近世・近代)

(○：縄文時代遺物採集地点，□：中世遺物採集地点，
●：近世遺物採集地点，破線で囲った梨地は範囲の
推定が難しい遺跡)



図版二二　Ⅱ3地区の遺跡と遺物採集地点

1987年３月25日　印刷
1987年３月31日　発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告II

立山町文化財調査報告書第２冊

編　集　立山町教育委員会
発　行　富山大学人文学部考古学研究室
印　刷　日興印刷株式会社